

---

# 英雄伝説 悪魔の軌跡

シャチ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

英雄伝説 悪魔の軌跡

### 【Nコード】

N9025Y

### 【作者名】

シャチ

### 【あらすじ】

気づいたら死んでいた！？転生！？じゃあブロリーで！！普通の大学生がブロリーとなって空の軌跡を破壊し尽くすお話です。この小説にはご都合主義が含まれています！それをご了承の上お読み下さい。

## プロローグ？（前書き）

はじめまして。シャチです。

この作品は処女作品なので

見苦しいところがあると思いますが  
どうか温かい目でお読み下さい。

## プロローグ？

「……………飲酒運転による事故発生率が過去最悪であり……………」  
「物騒だねえ……………」

彼は普通の大学生。普通の小学校、中学校、高校と進級していき、今年の春ついに大学生となった。ただやはり難関大学と呼ばれるところには進学できるわけもなく、地元の中レベルの私立大学へ進学することとなった。平々凡々、その言葉が彼にはよく似合う。

「大学に入ったところで変わったこともないなあ……………」

彼はただ漠然に大学に進学することだけを目標に努力してきたのでいざ進学してしまった今、目標は失われていたのである。

「……………そろそろ時間か……………はあ……………」

ため息をつき彼は立ち上がり、玄関へと向かった。

そして扉を開け外に出た瞬間目の前にトラックが現れ、彼の意識は無くなった。

「……………何処だこころ……………」

気がついたら彼は真つ白な空間で横になっていた。俺は玄関の扉を開けたただけだぞ、と彼は不思議に思い、立ち上がって辺りを見回してみる。

「気がついたようだな。」

その声には彼は驚き後ろを振り返ってみる。そこには白いロープをまとった、地にまで届く白いひげを蓄えたいかにも威厳のありそうな老人が佇んでいた。

「誰だオッサン。」

「オッサ・・・、コホン、単刀直入に言おう。ワシは神じゃ。」

神？気でも狂ってるのか？と思うが辺りは白い空間、そして直前のトラックの記憶。まさか、と彼は思う。

「もしかして・・・、俺って死んだ？」

「その通り、よく分かったな。お前は死んでしまったのじゃ。」

即答。その言葉を聞いた瞬間彼はまた倒れそうになった。だが彼は何とか持ち直し神と名乗る老人に一つの質問を試してみる。

「俺は・・・何で死んだんだ？」

「ふむ、お前の記憶は扉を開けたところで終わっているはずじゃ。扉を開けた瞬間、酔ったアホが運転するトラックが突っ込んできてお前と衝突したわけじゃな。」

まさか自分が飲酒運転の餌食となるとは・・・。彼は落胆するが言葉は続く。

「そもそもお前は奇跡的に助かるはずだったんじゃが・・・、ワシが居眠りをしている間に弟子が確率にイタズラをしてな、君と衝突してしまっただんじゃ。」

「オイオイ、そりゃ悪魔じゃないか・・・」

そんな弟子がいてたまるか。彼は怒りをあらわにする。

「ま、まあそれは由々しき事態じゃ。もちろん弟子は処罰した。そして君が不憫すぎるのでお詫びといっでは何だが・・・転生する気はないか？」

「転生？」

彼は聞きなれない言葉にキョトンとする。

「そつだ転生じゃ。君の知っている世界に君の要求する状態で転生させてあげよう。」

「ほ、本当か・・・」

「ただし要求は5つまでじゃ。さすがに10も20も叶えてあげる事はできない。」

彼は喜んだ。死んでしまったがそのおかげで平凡な人生から脱出できるのだ。

「じゃあ俺をブロリーにしてくれ！身長は・・・でかすぎると嫌だし190ぐらいまでにしてくれ。」

「ぶ、ブロリーじゃと！？悟空や悟飯ではなく？」

「ああ、俺はブロリーのほうが好きなんだ。カッコいいしな。あの力にはあこがれるだろう。」

「むう・・・、分かった。容姿はブロリーにしてあげよう。」

彼は嬉々と話す。が、

「能力はオポジションじゃぞ。」

「なんだと・・・じゃあしょうがないな。劇中以上の能力、戦闘力をつけてくれ。」

「いいじやろう。これで2つじゃ・・・言い忘れたがこのままではスーパーサイヤ人にはなれんぞ。」

「まじかよ・・・」

制限の多い神様だと思うがブロリーの能力は規格外。それも仕方がないと納得？する。

「じゃあ今発表されてる。ブロリーのスーパーサイヤ人、通常のスーパーサイヤ人、伝説化、そして3になれるようにしてくれ。あと・・・できるなら4にもなれるようにしてくれ。」

一度はブロリーのスーパーサイヤ人4を見てみたい（なるのは自分だが）。そう頼んだところ、

「まあ、いいだろう。ただしいきなりなられては向こうの世界が崩壊するかもしれん・・・。だから少し制限をかけよう。」

「崩壊って・・・、さっきから制限の多い神様だな。」

「そう言うな。そうじゃな、今言った前3つはきっかけを見つけたらなれるようにしよう。」

「きっかけ？」

「そうじゃ。ブロリーにしても悟空にしてもきっかけがあってなれるようになった。さすがに君もいきなりなれるようにすることはできない。だがそのきっかけを見つけたら通常に伝説にも3にもなれるようにしよう。4には・・・自分で努力してくれ。」

なれることは保障されたようだ。

「これで要求は何個叶えられることになるんだ？」

「そうじゃな、スーパーサイヤ人の部分はなんとかしよう。これで3つじゃ。つまりあと2つというわけじゃな。」

「あと2つか……。そういえば俺がなるブロリーは手加減ができるの？」

劇中のブロリーは「手加減って何だ？」と言っていた。まさかとは思うが……

「出来ないな。それもオプシオンじゃ。」

「やっぱりなあ……。しょうがない日常生活や普通のコミュニケーションが出来るぐらい手加減できるようにしてくれ。あと頭脳、頭を良くしてくれ。」

「ふむ、了解した。これで5つじゃ。変更は無いな？」

「ああ。」

返事をする神様？は後ろに振り返り、何かコソコソとし始めた。転生の準備でもしているのか？

「そういえば俺は何処の世界に転生するんだ？」

「そうじゃな……。空の軌跡の世界にでもどうじゃ？」

空の軌跡、彼がよく好んでプレイしたゲームである。

「は、早く転生してくれ！待ちきない！」

「そう急かすな……。そうじゃ原作知識とお前の個人情報の記憶は消去しておくぞ。」

「ちょ、そりゃまんまブロー」



「よし、転生じゃー」

こうして彼ことブローリーは空の軌跡の世界で転生するのであった。

## プロローグ？（後書き）

さすがに難しいですね・・・

転生話だけでこんなに長くなってしまいました。

さてプロローグとなった彼はどんな行動をとるのでしょうか。

ほぼチートですが原作崩壊はあんまりしません。

あと更新はゆっくりとなると思います。

ご承知ください・・・

ブローグ？

「・・・何処だここは。」

気がついてみると彼は森の中、しかし舗装された道の上で佇んでいた。

「俺は本当に転生したのか・・・」

辺りを見回してみるが誰もいない。

「・・・試してみるか。」

そう言うと彼は腕を前に突き出し、

「フンッ。」

気弾を放出した。軽く気を入れただけであるが、目の前で爆発が起こり小さなクレーターが出来上がった。

「確かに能力をもらえたようだ。では・・・」

腕を交差し、

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！」

力を入れ気を高めるが、

「さすがにまだスーパーサイヤ人にはなれないか・・・」

転生する前に神に言われたとおり転生直後にはスーパーサイヤ人にはなれない。何かキツカケがなければなれないのだ。

「それよりもこの体・・・小さくないか。」

それもそのはず。彼の身長は今130cmにも満たないのだ。彼の要求した身長とは程遠い。

「元々のブロリーの身長は2mを越えていたしな・・・下手に要求したから微調整がきかなかったのか？まあいずれ成長するだろう。それにしてもここは本当に何処だ？空でも飛んでみるか。」

彼は現状を把握しようとするが、

グウウウウウ

「・・・腹が減ったな・・・ここに人はいるのか？」

まず人を探そう、そう考え彼は歩き出した。

「この度この戦争の講和条約が結ばれるエルベ離宮の警備、及び立

会いの命を女王陛下から直々に仰せつかった!!」

白髪が目立つ初老の男性が目の前の兵に檄を飛ばす。

「今現在我らがリベール王国軍とエレボニア帝国軍は休戦状態である!そのような状態の中、何か不測の事態が起こったならばまた戦争の火種となるかもしれん!」

男性は続ける。

「なので我々が直々にエルベ離宮の周辺、エルベ周歩道における魔獣の討伐を行うこととなった!」

男性の名はモルガン。王国軍のトップ、將軍の地位に就いている。

「内容は以上だ。さあ出発だ!」

そう言い放つとモルガンは兵を従えエルベ離宮へと向かっていく。

「・・・誰もいないのか。」

彼は道に迷っていた。途中空を飛ぼうと考えたが、途中あまりの空



「・・・さすがに俺でもゲテモノは食べ・・・ああ・・・」

彼はそのまま地に倒れた。

ブローグ？

「今現時刻をもって討伐作戦を開始する！」

周歩道に到着したモルガン一行はモルガンとその側近を残し散っていく。

「……この講和は絶対に成功させなくてはならない。」

愛するリベールの地にこれ以上血の雨を降らしたくない。そう決心しモルガンは作戦の終了の報せを待つ。

「將軍！」

散っていた兵の1人が何かあわてた様子でモルガンにかけよる。

「どうした！」

「それが元々木々があつた場所が消滅しクレーターが来ています。」

「クレーターだと！？まさか爆弾でも仕掛けられているのか!？」

「今は分かりません！さらにクロノサイダーの群れが惨殺されています！」

クロノサイダー、彼が難なく倒した魔獣であるが危険度が高い何人も被害にあっている魔獣である。

「何が起こっているんだ……。分かったワシもすぐに向かう。案内しろ！」

「はい！」



モルガンは現場へと向かっていく。

「まさかここまでとは・・・」

現場に到着したモルガンは驚愕していた。あの美しい周歩道の木々が無くなり代わりにクレーターが出来上がっていたのだから。

「・・・眺めていてもしょうがない。調査を頼む。クロノサイダーの群れは？」

「こちらです・・・」

「これは・・・。」

モルガンは再び驚愕することとなった。皮膚が厚く耐久力が高いクロノサイダーの体が無残にもバラバラになっていた。

「一体誰がやったんでしよう……。」

「バカモン！それを調査しなければならぬのだろうが！」

「申し訳ありません。」

モルガンは兵を怒鳴りつけるが内心自分も不安であった。

「ワシは一時離宮の方へ向か……あそこに誰か倒れているぞ！」

少し森に入ったところに少年が倒れているを見つけると、すぐに駆け寄り抱き上げ、

「なぜ見落とす！貴様らには危機感というものがないのか！」

「申し訳ありません！」

「言い訳は後で聞く！いまはこの少年の治療が先決だ！」

死刑宣告を受け涙目になる兵を残し、モルガンは少年を抱えたまま離宮へと向かった。

「……ここは……」

彼はベッドの上で目を覚ました。これで気を失ったのは何回目だろう。ここは何処だ？と考えふと目を横にやると、

「果物……」

ようやく食べ物を見つけるやいなや、彼は果物に貪りついた。一応彼も子供の姿とはいえサイヤ人、果物はものの数分で消滅した。

「気がついたようだな。」

「??？」

扉を開け、男性が部屋に入ってきた。

「そう身構えるでない。ワシはモルガンという者だ。」

「モルガン？」

「そうモルガンだ。君の名前はなにかな？」

慣れない優しい顔で質問をするモルガンとは裏腹に、彼の心の中は焦りと不安が埋め尽くしていた。

（あれ？俺って誰だっけ？俺はたしか死んで転生して……。その前は何だったんだ？俺はいつたい……）

転生する際この世界の記憶と前世の記憶を消去された彼は答えることが出来ない。

「どうした？言えないのかね？」

「俺は……俺は……」

彼は頭を抱えだすが、ふとある名前が彼の頭の中に浮かび上がった。

「ブロリー……」

「??？」

「そう俺の名前は……ブロリーだ。」

ブロリーとしての新たな人生が始まる。

## プロローグ？（後書き）

前世の記憶が無くなり正真正銘プロリーとなりました。  
そもそもエルベ離宮にベッドってありましたっけ？  
もし矛盾や設定のミスがあればご指摘してください。

ちなみもう少しプロローグは続きます。  
あと感想ももらえたら嬉しいです・・・

## プロローグ？（前書き）

すみません、超急展開です・・・

ブローグ？

「ではブロー君。君は何故あの場所で倒れていたんだ？」

「・・・腹が減って気絶したんだ。」

今この部屋ではモルガンによる軽い質問が続けられていた。

「腹が減ってか・・・。戦争中だからな。食べ物が無いのも分かる。だがあんな場所に行くことはないんじゃないか？」

「いや気づいたらあの森にいた。歩いていたらあそこに辿り着いただけだ。」

「・・・詳しいことは聞かないでおこう。そうだ、君はあの魔獣について何か知っているか？」

「あの魔獣？」

「君の近くにいた、あー・・・バラバラになっていた魔獣のことだ。」

「ああ、あれなら襲ってきたから俺がやった。」

そう答えた瞬間、モルガンは眉をひそめた。

(口がすべっちまった・・・)

ブローは後悔するが、

「ブロー君、あの魔獣は大の大人でも武装しても1人では到底勝てんものだ。君のような子供がどうして勝てたんだ？」

(まずったな・・・しょうがない。)

ブローは腹をくくり白状することにした。

「たしかにあの魔獣を倒した記憶はあるのだが、無我夢中だったの  
でどうやって倒したのか分からない。」

さらにモルガンは怪訝そうな、警戒するような顔になるがそれをす  
ぐ解き、

「そうか……。君がやったのか。そうとう君は強いのだな。」  
「??？」

急にモルガンはブロリーを褒めるような発言をした。しかしそれと  
同時に

(急に褒めてきたな……。何を考えているんだ……)

ブロリーも警戒することとなった。その警戒は正しく、

「そつだ君は周歩道で起きた爆発のことを知っているか？」

案の定自分がやった気弾による爆発のことを聞いてきた。無論ブロ  
リーは

「爆発？」

何も知らない、無関係だという雰囲気でも聞き返した。

「(何も知らんようだな……。) いやなに周歩道で少し爆発が起こ  
つたらしくてな。目撃者を探しとるんだが誰もいなくてな、君も何  
かしつとるんじゃないかと思ったんだ。」

「俺は……。そんなもの知らない。」



なんとかごまかせたようだ。

「そうか。それじゃしょうがないな・・・そうだ君、家族はいるのか？」

「家族？」

ブロリーは転生者、そんなブロリーに家族は・・・

「いない。」

「いない？」

「そう、みんな死んでしまった。」

半分嘘を織り交ぜながら答えた。するとモルガンの顔は曇り、

(いない・・・そうか孤児か・・・。マーシア孤児院に送るか、いやしかしもし本当に魔獣を倒したのなら・・・)  
「??？」

一人物思いに入ってしまった。

「ああ、すまない。(ならば・・・)では君は行くところが無い、ということかね？」

「・・・ああ。」

「そうか・・・なら一つ提案がある・・・ワシと一緒に住まんか？」

「アンタと一緒に？」

予想外の言葉につい聞き返してしまう。

「そうだ。休戦中、といつても戦争中なのは変わらん。君が一人で暮らせないことに変わりない。」

「……」

「そこでだ。ここで会ったのも何かの縁だ。ワシの息子にならんか？」

「ブロリーは少し考える。しかし彼はこの世界について何も知らない。故に辿り着く結論は……」

「すぐに答えは出さんでもいいが……」

「いや、どうかお願いしたい。」

そう答えるとモルガンは驚いたような顔になり、

「いいのか？」

「ああ、あんたの子になれるならこれ以上の幸せは無い……」

モルガンは少し微笑み、

「ならばこれからはワシとブロリーは親子だ。よろしくな。」

「こちらこそよろしく頼む。」

二人は固く握手をした。

くおまけく

「そういえばブローリーはいくつなのだ」

「( )いくつなんだこの体は？( )・・・6歳だ。」

「・・・その年では大きいほうだな。」

## プロローグ？（後書き）

本当にすいません！プロリーの親父に似合うのがモルガン將軍しか  
思いつかなかったのでついやってしまいました！

しかもプロローグはまだ続きます。どうかご容赦ください・・・

プロローグ？

「ワシは少し用事がある。この部屋で待っていてくれんか。」

「用事？」

「そうだ。ここ離宮で今回の戦争の講和条約が結ばれることとなっている。」

モルガンは扉へと近づきながら、

「さすがにお前を連れて行くわけにはイカンからな。スマンがここに残ってくれんか。」

「ああ。」

「そうか。しばらく待っていてくれ。」

そう言い扉の外へと出て行く。

グウウウウウウ

「・・・また腹が減ったな。」

数時間後

「今帰ってきたぞ。」

「・・・」

「ン？・・・また気絶しておると・・・？」

「スマンな・・・」

「戦争中は食料が少ないというものを・・・」

ブロリーは再び果物をもらい何とか飢えをしのいだ。

「いや本当に助かった（まだ食い足りないが・・・）。」

「たく仕方が無い。行くぞ。」

「どこにだ？」

「王都に一時帰還することとなった。報告会をかねて王宮で会議を開くのでな。」

モルガンはブロリーを引きつれ外へと出て行く。

「グランセル

「ここが・・・」

「そうだここが王都、グランセルだ。」

王都グランセル、リベール王国の中心に位置し唯一帝国の侵略を防いだ町。

「美しいな。」

「だろう。そう言われるとこちらも嬉しくなるものだ。さあ、こちらに來い。」

二人は城へと進んでいく。

「これはまた・・・」

「グランセル城、我らがリベールの象徴だ。見たことが無いのか？」

「ああ、初めてだ・・・」

門の前にまで来ると

「あつ、モルガン將軍！」

「ふむ、門を開けてもらえぬか。」

「了解しました！開門！」

衛兵大声を出し指示を出すと門が開いていった。

「將軍。」

「何だ。」

「つかぬ事をお聞きしてもよいですか？」

「言ってみる。」

「その横にいる子供はどうされたのですか？」

横にいる子、ブロリーのことだ。

「ああ、少し事情があつてな。ワシが引き取ることになった。」

「將軍がですか・・・？」

「余計な詮索はするでない！」

「りよ、了解しました！」

「まったく・・・行くぞブロリー」

そう言い二人は城に入っていく。

「スマンがこの部屋で待つてくれぬか。」

「またか・・・食べ物は何？」

「少しは我慢せい！まったく・・・そこにあるものは自由に食べてはよいからな。」

モルガンは半ばあきらめているようだ。

「ワシは会議に出席する。しばらくの間だ。おとなしくしていてくれ。」

再びブロリーを残し、モルガンは出て行く。

「では・・・」

もちろん食べ物全てを食い尽くすブロリーであった。



「・・・戦争の被害はあまりにも大きく、犠牲も数多いものとなりました・・・」

少年はとっけているが、美しく、それでいて優しい目を持った女性が話す。

「それらは決して返ってくるものではありません。」

「・・・」

「・・・」

周りの人物は静かに女性の言葉に聞き入る。

「だからといって憎しみばかりを持ってはいけません。そうすれば亡くなった者達が浮かばれません。」

女性は続ける。

「今我々がするべきことはリベールの再建です。必ず戦争前よりもリベールを良いものとしようではありませんか！それが亡くなった者への手向けとなります。以上で私の話は終わります。各々、自分の持ち場へとついてください。」

「ハッ」「ハッ」「ハッ」

女性が言い終わると周りの人々は敬礼をし解散した。話していた女性の名はアリシア・フォン・アウスレーゼ、リベール王国の女王である。

「あとモルガン將軍、あなたは少し残ってください。」

「???了解しました。」

女王からの指名を受け、女王とモルガンは人がいなくなるまで待機することとなる。

「して何用ですか？」

「將軍、ここには二人だけ、そう固くなさらずに・・・。」

「そういうわけにはいけません。立場はわきまえなさいといけませんぬ。」

モルガンがそう言つとアリシアはため息をつき、

「あなたは本当軍人の鑑ですね。よろしいことでしょう。」

「ハッ！光栄であります。」

「ところで用件ですが・・・あなたは子供を引き取ったようですね。」

「知っておられるのですか？」

モルガンは軽く驚くが、

「フフフ、うわさで聞きました。あの將軍が子供を引き連れているところを見ると何かほほえましく思えると・・・。」

「・・・」

モルガンは軍の中でも硬派で通しているので内心恥ずかしくなる。

「本当のようですね。そこで相談ですが・・・ここへ連れてきてもらえないでしょうか。」

「何故？」

モルガンはこちらの言葉のほうにより驚いた。

「それはですね・・・クローゼ、こちらへ来なさい。」

そついうと扉を開かれ女性に引きつられて少女が入ってくる。

「クローゼ・・・私の孫はこの城ですつと一人でした。戦争中だったので遊ぶことすら出来ませんし、そもそも城の中では友達なんて出来ません。」

「・・・」

モルガンはアリシアの言葉を静かに聞く。

「そこであなたが子供を引き取ったという話を聞きました。どうかその子をクローゼの友達としてあげたいのです。」

「・・・了解しました。では少々お待ちください。」

そつ言いモルガンは部屋を出て行く。

数分後

「今度は何処に行くんだ？」

「女王陛下のところだ。くれぐれも無礼な発言はするなよ！」

モルガンはブロリーを引きつれ部屋へと入っていく。

「お待たせしました。」

「まあ、その子がですか？」

アリシアはブロリーを見つめる。なるほど、気のよさそうな子だが、  
とアリシアは思った。  
が、

「・・・」

「あらどうしたのですか。」

少女はアリシアの後ろに隠れてしまった。人見知りなのであろうか。

「このオバさんは誰だ？」

「コラッ！恐れ多くも女王陛下になんたることを言うか！」

そう言うとモルガンはブロリーの頭に拳を落とした。

「一体何するんだ!？」

「貴様が無礼なことを言うからであらうが!」

モルガンとブロリーは言い争いを始めた。だが、その様子を見て、

「クスッ・・・」

「「?」」

アリシアの後ろに隠れていた少女が少し微笑んだ。

「あの子は誰なんだ？」

「だから貴様は・・・あの方はこの女王陛下の孫娘、クローディア  
王女だ。」

「フフ・・・さあクローゼ、自己紹介をしなさい。」

そう少女は言われるとブロリーの前に行き、

「・・・私、クローディア・フォン・アウスレーゼ。クローゼって  
呼んで。」

「俺はブロリー、そのまま呼んでくれ。」

これがブロリーとクローゼの出会いとなるのであった。

## プロローグ？（後書き）

これでプロローグ、過去編は終わりです。長かった・・・自分にはまとめる力が足りないのかな・・・

そしてヒロインはクローゼに決定です。これは変更しません。誰が何と言おうと変更しません。

さてこれからブローリーはどんな活躍をするのでしょうか。・・・いや中身はぜんぜん違うからブローリーって呼んでもいいのかな・・・？

あとモルガンの姓は何でしたっけ？このまま続けられはしますが気になっています・・・

## 第一章？（前書き）

いきなり時間が飛んで8年後です。気にしないでください・・・

## 第一章？

ーレイストン要塞

「では本日最後の訓練を行う！」

白髪が目立つ、威厳のある男が発言する。

「承知の通りこの演習には王族関係者が視察に来られている。毎年恒例のリベール軍と王室親衛隊の合同演習の目玉だ。くれぐれも無様な真似をみせるな！」

「……サイエツサー！！」「」「」

男性、モルガン将軍が発言し終わると、目の前の兵士達は全員揃って敬礼し返事をする。だが、

（おいおい今年もやるのかよ……）

（毎年これだもんなあ……最初は何を馬鹿なことをやらせるんだ！って思ったんだけど……）

（しかも年々でかくなっていくなんてどんな冗談だよ……）

全員訓練する前から打ちひしがれていた。二人を除いて。

「諸君の気持ちは分かる。だがこれは最高の訓練となるのだ。これだけは理解してくれ。」



「我々もそうだ。これぐらいでくじけていては王室を守ることは  
できん！」

「…………サイエツサー！！！！」「…………」

二人の男性と女性、マクシミアン・シードとユリア・シュバルツ  
はそう檄を飛ばすと兵士達はやる気を取り戻す。

「……準備はよいか？」

「もちろん！」

「いつでも！」

「そうか……」

モルガンは返事を受け取ると大きく息を吸い込み、

「これより最終訓練を行う！目標は一人、プロリーだ！始め！」

「……………うおおおおおおおおおお！！！！」「…………」

訓練が始まるとともに、兵士達は目標の大男、プロリーへと向か  
って行った。

「……………うおおおおおおおお！！！！」「…………」

兵士数人が突撃してくるが、

「フンッ」

「「「「うわあああああああ！！！」「」」」

軽くブロリーは腕を振り抜き兵士を吹き飛ばしていく。

「「とつた！！」「」

後ろに回った兵士がそのまま剣を突き刺そうとするが

「「何！！」「」

ブロリーは後ろを振り向かず、素手のまま剣をつかむと、

「ウオラア！」

「「「うわああああ」「」

そのまま壁際にまで投げ飛ばした。

「貴様ら本当にやる気があるのか・・・？」

「「「「ヒイツ！！」「」」」

ブロリーが目の前の兵士に睨みつけると兵士達は震え上がり、

「ではこちらからいくぞ！！」

「「「「来るなああああああああ」「」」」

一対多数の蹂躪が始まった。

「モグモグ・・・本当にあの男は強いな・・・モグモグ」

「公爵閣下、見るか食べるかどちらかになさった方が・・・」

刈上げの男性とその付き添いの老人が話す。

「まあそう硬いことを言うな！」

「そ、そう言われても・・・」

「それよりもフィリップもよく見る。あんな動きを人間ができるものなのか？」

「・・・私が存じている者にあのような動きができるものはいませぬ・・・」

刈上げのほうの男性はデユナン・フォン・アウスレーゼ、次期国王候補の一人である。その横の注意をする男性はフィリップ・ルナー、悩み多き老人だ。

「本当に強い・・・」

「ええ姫殿下、私もここまで強い男とは思いませんでした。」

モルガンとその横の女性は真剣に訓練を観戦する。その目の前では圧倒的力でねじ伏せられていく兵士の図が繰り広げられている。

「残り二人になりましたな・・・」  
「シード少佐とユリアさん、どう立ち向かうのでしょうか・・・」

「残りは二人か・・・」  
「・・・」

シードとユリアは身構える。対して散々兵士を打ちのめしていた  
ブロリーは息一つ上がっていない。

(ユリア君・・・)  
(分かっています)

二人は目で会話するとそのままブロリーに向かっていった。

「ハアアアアアアア！」  
「正面から向かってくるとは・・・本当に軍人か？」

二人は剣を突き出しブロリーはそれをつかもうとする。

「今だ！」  
「ハッ！」

「!?!」

シードはそのまま突き刺しにかかり、ユリアはブロリーの頭上へジヤンプし剣を振り下ろそうとした。

( (今度こそとった!) )

だが、

「オラア!」

「グハアツ!」

「なにつっ!?!」

ブロリーはシードの剣を避けそのまま突き飛ばすとそのまま倒れこみ、

「又ンツ!」

「カハツ!」

地を掴み、その長い足を以って逆立ちのままユリアを蹴り飛ばした。

「ここまでのようだな・・・」

モルガンはそう判断すると、

「そこまで!」

訓練終了の合図を告げた。

## 第一章？（後書き）

戦闘描写って難しいですね。躍動感があまりないなあ・・・

さあ前書きで述べた通り8年後の世界です。これからは原作を織り交ぜながら書いていきたいです。

最後に感想をお願いします。

## 第一章？

訓練終了後、観戦していたクローゼがブロリーの元へと駆け寄ってきた。

「お疲れ様！」

「疲れてないがな。」

ブロリーがそう返事をする。クローゼはフフ、と笑った。

「まったくあれだけ動いて息一つあがらないとは…毎年思うが君は本当に人間なのか？」

「当たり前だ。それよりも毎年俺と闘ってまだ一回も俺に攻撃を当てた奴はいないんじゃないか？」

ブロリーがそう返すとユリアは頬を引きつらせながらはは…と苦笑いをした。

「ま、まあそれよりも我々としては本当に軍に入ってもらいたいのだが…」

「またか…何度もいつてるだろ、それは無理だ。」

「群れるのは嫌いというんだろ？」

「そうだ。」

集団行動が嫌いなだけである。

この八年でブロリーは大きく成長した。

身長192cm、体重126kgの筋骨隆々の大男。

モデルとなったブロリーより小さいのは彼が転生する際にそう要求したからである。現在一部の軍関係者によるとリベール最強の男と囁かれているらしい（カシウスを除いて）。

ちなみに転生する際の記憶の方が現在では大分霞がかっている。神の計らいであろうかいつまでも当時の記憶を残さないためにこっそりそうしておいたのかもしれない。

「ブロリーもそのぐらいにして…ユリアさん、シード少佐、訓練お疲れ様でした。」

「こちらこそ。」

「ブロリー君来年もよろしく頼むよ。」

「ああ。」

会話を終わるとユリアとシードはふらふらと各々の持ち場へと引き上げて行った。

「さて訓練も終わったことだ…クローゼはこれから何をするんだ？」

「あ、そのこと何だけど…」

「殿下、ブロリー、少しこちらへ。」

クローゼが言い淀むと同時に兵舎の近くからモルガンが声をかけた。

「親父、どうした？」

「それは後で話す。先に着替えて来い。」



ブロリーは頭に？マークを浮かべながら着替えに行った。

「で、何の用事だ？」

ブロリーが兵舎の一室に行くとそこにはモルガンとクローゼがいた。

「ブロリー…その格好はどうにかしてくれ…」

ブロリーが着ている服装は上が黒、下が白で帯が赤の拳法着である。王都で開かれたカルバート市で購入したものだがりベルではあまりにも奇抜なのでよく奇異の目で見られる。

「そう言うな、コレは気に入ってるんだ。それよりも何の用事なのか言ってくれ。」

「まったくお前は…まあいい。本題に入ろう。」

モルガンは態度を改めて言った。

「この度姫殿下がジェニス王立学園へと編入されることが決まった。」

「そうなのか？」

「はい…」

どうやら事実のようである。

「そこでだ、お前も護衛として共に編入してもらいたい。」  
「…は？」

ブロリーはいきなりの急展開に啞然とする。

「な、何でまたそんなことを…」  
「当たり前のことだ。王立学園といつても我々の保護下より外れる。そこでだ、護衛として誰かをつけることにした。」  
「そんなのは分かる。だから何で俺を…」

ブロリーは浮かび上がる疑問を口にした。

「この転入は世間には一応世間には秘匿されるものとなる。そこであからさまに護衛をつけるわけにはいけない。他の生徒の目もあるからな。」

「…」  
「なので同年代のものを共に編入させることにした。だが護衛である以上それだけの能力を持ったもので無ければいけない。そこでお前が選ばれたわけだ。幸い頭もいいしな。」

モルガンはしたり顔で言い終える。だが、

「俺は嫌だぞ。」  
「…何？」

ブロリーは否定の言葉を口にする。

「ジェニスは全寮制だろ。俺は四六時中誰かと一緒にいるのが嫌なんだ。」

先ほども述べたが集団行動が苦手なだけである。

「女王陛下からのお頼みだそうだ。」

「な……」

アリシアはブロリーのことをいたく気に入っているらしい。礼儀正しく（アリシアの前では）、クローゼと仲良く遊ぶさまからの評価だ。

「だ、だが俺が行くとリアンヌが悲しむぞ……」

リアンヌとはモルガンの孫娘である。モルガン宅ではブロリーはリアンヌをよくかわいがっている。

「もちろんリアンヌの了承はとっているぞ。」

「な……」

やられた、とブロリーは思う。

「そ、それでもだな……」

「……ブロリー……」

今まで口を閉じていたクローゼが言う。

「そんなに私と行くのが嫌なの……?」

「い、いやそういうわけでは……」

クローゼがブロリーの顔を見て言う。ブロリーは長身なので必然的にクローゼは見上げるように、上目遣いとなる。この状態のクローゼにブロリーは何度も負けてきた。

「わ、分かった分かった。…俺も一緒に編入するよ。」

ついにブロリーは根負けした。

「本当！？ありがとうブロリー！」

「…はあ。」

喜ぶクローゼとは対照的に、ブロリーはため息をついた。

「ちなみにお前の荷物は既にまとめている。」

「やりやがったな…」

## ージェニス王立学園

現在ブロリーとクローゼは教室の前に立っている。編入する際にブロリーも試験を受けたが結果は好成績、学園の職員室では成績優秀者が二人も来ると話題になっていた。

「はあ……」

「もうブローリーだったら……いい加減にやる気を出してよ……」

「いや、だってなあ……」

小声で話していると教室の中から一際大きな声が聞こえてくる。

「では編入生に入ってきてもらいましょう。では入ってきて下さい  
！」

扉が開かれると先にクローゼが教室に入ってしまった。

「1年に編入となったクローゼ・リンツです。この素晴らしい学園生活を長い間たのしみしておりました。今日、みなさんの一員となれてとても光栄に思います。」

クローゼは堅苦しく自己紹介をしていく。

「私は飛んだ未熟者で、皆さんにご迷惑をおかけしてしまうかもしれません……精一杯頑張りますので。どうか、よろしく願います。」

自己紹介をし終わると教室中から拍手をされる。

（うーん、突然の編入生か……。）

メガネの女子生徒は隣の刈上げの男子生徒に小声で話しかける。

（良いところの子かな？ちょっと堅い感じもするけど……）

良いところどころか王族である。

(1年の5月に編入ねえ。ちょっとワケありっぽいよな。)

話している内に先生が再度口を開く。

「実は、もう一人編入生がいます！」

そう言うのと教室内は騒然となった。

(まじかよ！やっぱ絶対ワケありだつて！)

(ちよつと落ち着いて！話は一回見てからよ！)

「では入ってきて下さい！」

その声と共に一人の男子生徒が教室に入ってきた。だがそれと同時に教室が静かになってしまった。

それもそのはず、顔立ちは良いが超長身、制服の上からも分かるほど筋肉が膨れ上がっている大男が入ってきたのだから。

「「「「「.....」」」」」

「ハハハ...では自己紹介をしてください。」

「...はい...」

男は口を開く。

「ブロリー...です。」

ブローリーとクローゼの学園生活が始まった。

## 第一章？（後書き）

ブロリーがジエニスへ編入してしまいました。さて、どんな問題が起こるのでしょうか！？

ちなみにモルガンと話していたときの服装は下はブロリーの、上はフュージョン後の服と思って下さい。

クローゼが編入したのは14歳のときのようなので修正しました。ブロリーが大きくなりすぎだと思いかもしれませんがお許し下さい

…



## 第一章？（前書き）

学園生活編です。

## 第一章？

「「「「「……………」」」」」

教室内はいまだに静まり返っていた。

「と、とりあえず空いてる席に座ってもらおうかしら。」

先生がとりあえず話題を振ろうと口を開く。

「ええ〜っと、ハンスとジルの後ろが開いてるわね。そこに座ってもらえるかしら。」

（やっぱりかあ〜…）

（まあいいじゃない。開いてるのがここだけなんだし。）

先生に指示されるとクローゼとプロリーは席へと向かう。

（大丈夫なのでしょうか…）

（ま、なるようになるだろう。）

二人が席に座るとその前にいるジルが話しかけてきた。

（ねえねえ、どこからきたの？趣味は？）

（ええ〜っと…）

（そうだなあ…）

二人は返事をしようとするが、

「はい、それじゃあ授業…って次は体育ですね。皆さん移動してく

ださい。」

先生の指示に防がれたようだ。

「あ、次は体育なのか。じゃ、あとで聞かせてね。」

「あ、はい分かりました。」

そう言うとジルとその他の生徒は皆外へと出て行った。

「ブロリー…」

「どうした？」

「私はやっていけるのでしょうか…」

クローゼは重い調子でブロリーに話しかける。

「そんなのは分かんねえな。さっさと着替えに行くぞ。」

「…はい。」

話を切り上げて更衣室へと向かった。

その名の通り多くの生徒に向けた講義を行う場所。その広さから屋内競技の授業にも使われる。

「これからフェンシングの授業を行います。幸いあなた方は経験者が多いそうなので、すぐに試合が出来そうですね。

担当教師が生徒に向けて発言する。

「この中でフェンシング未経験の人はいますか？」

先生が生徒に呼びかけるが誰も手を上げない。先ほど述べたが大体が経験者なのだ。一人を除いて。

「…」

ブローリーは一人手を上げた。今まで素手一本で戦ってきたブローリーには剣技は無縁だったからだ。

「はい、いましたね。何も恥ずかしがることはありませんよ。君は手足が長いのですからすぐに強くなりますよ。」

先生はブローリーにそう言うが正直ブローリーにとってはどうでもよかったです。

「初めてなのでしょうから少し体験してもらいましょうか。その剣を持って前に出てきてください。」

ブローリーが前においてある剣を持って先生の前に立つ。

「では先生に向けて突いてみてくださいさ」「ブローリーっ！」「??」「」

先生が話している途中にクローゼが声を上げた。

「絶対突いちゃだめですからね！」

「…分かってる」

「一体何なんですか…まあいい、さあどうぞ。」

先生が合図を出すとブロリーは？軽く”剣を突き出した。それを先生は軽く受け流すが、

(速い！こいつ初めてじゃないだろ！！)

先生は内心恐怖した。そして次々と剣を突き出され壁際へと追い詰められていく。そして追い詰められた先生に向けて

「フンッ」

ブロリーは再度剣を突き出した。しかし先生もまたそれを受け流し壁に剣が？突き刺さり”、先生は距離をとる。

「ハハッ、さすがに初心者じゃこんなもので…？」

先生は生徒の視線がある一点に向かっていてのを発見した。そして自分もその先を見してみる。

するとそこには壁を貫通しているブロリーの剣があった。

「やりすぎた…」

「お前すげえな！」

授業終了後、紫髪の男がブロリーに話しかける。

「そうか？」

「そうか？つてそりやとんでもないことだぜ！先生の顔を見たか？  
口がこんなにも開いてたぞ！」

男は楽しげに話す。

「まあちよつとやりすぎたかもしれないけどな。∴それよりもお前の名前は何だ？」

「ああ、自己紹介はまだだったな。俺はハンスだ。お前の席の前に座ってるだろ。」

「ああそうだったな。これからよろしくな、ハンス。」

「こっちもな！」

そう言うとブロリーとハンスは握手をする。

その姿を遠くから見る少女の姿があった。

「ブロリーはもう打ち解けている…私は本当にここで過ごせるのでしょうか…」

クローゼは少し寂しい気持ちとなった。

## 第一章？（後書き）

これから学園生活に触れていきます。といってもthe 3rdの話に手を加えただけです。オリジナルの話は大分先です。最悪FCが終わった後かなあ…

次話ではあの赤髪の男が出演予定です。楽しみにお待ち下さい。

あと感想をお願いします。



## 第一章？（前書き）

今回はちょっと長いです。

## 第一章？

### 1 2週間後 教室

放課後、クローゼは授業の片付けのため教室に残っていた。ちょうど作業を終えようとしていたところ、先生がなにやら慌てた様子で教室に入ってきた。

「はあはあ…もう皆帰っちゃったのかしら…」

「？どうかされましたか？」

クローゼは先生に話しかける。

「大切なプリントを配るのを忘れてて…すぐに戻って配ろうとしたら皆帰って…」

(先生がお困りになっている…よし…)

クローゼは何かを決めたらしく、

「あの、私でよろしければお手伝いしますけど…」

「んー…でもお…」

先生は少し考えるが、

「んー、そうね…じゃあ、頼んじゃおうかしら。」

「は、はい。」

クローゼは先生からプリントを預かる。

「これは？」

「このプリントを社会科の皆に配っておいて欲しいの。大切なプリントだからよろしくね。」

そう言うと先生は教室から出て行った。その後、クローゼはプリントを見ると顔を強張らせた。

「このプリントって、年間単位表……？これはきちんと配らないと……」

クローゼはプリントを配り始めた。

↑クラブハウス

生徒会室、更衣室、食堂があり生徒の憩いの場となっている建物。

その一階には

「……最終決定にはヤツが必要だ。お前達は早急に探し出せ。」  
「は、はいっ！」

何やら指示を出されるハンスとジルと、

ガツガツガツ

「…うまいな。」

オムライスを食べ続ける生徒がいた。

「2人とも、また後でね。」

「はい」

指示を出した男子生徒が2階に上がると、ブロンドヘアの女子生徒も2階へと上がっていった。

バクバクバク

「…じゃ、搜索再開と行きますか。」

「そうだな…それにしてもルーシー先輩は本当に綺麗だなあ」

バクバクバク

「またあんたは…」

「だって本当のことじゃないか。あの美しいお姿、気品のある雰囲気、ああ〜最高だ！そう思わないかブロリー！」

バク、ゴクツ…ガツガツガツ…

ブロリーはひたすら食べ続けていた。

「おいブロリー、聞いているのか…ってそれ何皿目だ…？」

ブロリーの周りには一体いくら食べたのであろうか、皿がうず高く積み上げられていた。

「20…からは数えてないな…」

「お前の腹はどうなってるんだ…それよりも今の俺の話聞いてたか？」

「スマン、聞いてなかった。」

ブロリーはそう言うと再び食べ始めた。

「ブロリーはそんな話に興味が無いようね。」

「ブロリーちゃんと聞いてくれよ〜」

「分かった分かった抱きつくな。」

ハンスはブロリーに冗談交じりに抱きつくくとブロリーの動きが止まった。

「ブロリー？」

ブロリーは入り口の方を見ている。すると入り口の扉が開かれクローゼが入ってきた。

「クローゼか。どうしたんだそのプリントは。」

「あ、ブロリー…とジルさんとハンス君？少し先生のお手伝いをさせて頂いていて…」

そう言うとクローゼは手に持っているプリントの中から三人のものを渡した。

「で、配っているわけか？うーん、俺なら断っちまうけどな。」

「クローゼ、あたしたちも手伝おっか。」

ジルがクローゼに申し出ると、

「いえ、これは私の仕事ですから。ではジルさん、ハンス君、ブロリー、それでは失礼します。」

クローゼは一言で断ると再び作業を始めた。そしてその姿を見つめるブロリーがいた。

「……」

「ねえ、ブロリー……」

「どうした？」

「私彼女と同室になったのよね……寮の部屋……」

「……それはキツイな……」

三人がため息をつくときジルは再度口を開く。

「あの子上品だしすごく礼儀正しいんだけど……どこか余所余所しいのよね。挨拶ぐらいしかしないし……」

「そうか……」

ブロリーはその言葉を受けると少し思考する。

「そうだな……分かった。」

「何が？」

ブロリーはそう言うと立ち上がって出て行くこととした。

「ハンス、会計頼むぞ。」

「いくら払えばいいんだよ……」

ブロリーとハンスは小テストで賭けをしており、負けたほうが奢るという約束をしていた。

涙目になるハンスを見るとブロリーはフツと笑って出て行った。

―夕方 中庭

広場には手伝いが終わったのだろうか、座り込むクローゼがいた。

「…はあ…」

一人ため息をつくと後ろから男が近づき、クローゼの方にポン、と手を置いた。

「クローゼ。」

「あ、ブロリー…」

クローゼが力無く返事をする、ブロリーはその横に座った。

「お前はずっと何か悩んでいるな。」

「…」

ブロリーは続ける。

「そんなので学園生活は楽しいか？」

「え、えつと…」

クローゼは言葉に詰まるが、

「ブロリーみたいに慣れてないけど…私はこれでも頑張っているから…！」

クローゼは少し声を荒げて言う。するとブロリーは、

「そうは言ってもお前は何か一人で抱え込んでるように見えるな。」

「私は…」

「もう少し周りを頼っても良いんじゃないか。」

そう言うと立ち上がって寮のほうへと向かっていった。

「ブロリー…私…」



「よっ、編入生！」

「??？」

ブロリーが寮に向かっていている途中、何やら軽そうな男が近づいてきた。

「生徒会長…か？」

「そう、よく知ってるじゃん。あっ名前はレクターね。」

レクターはブロリーの前に立つと驚いたような顔になり、

「ひゃあ〜噂には聞いてたけどデカいな〜」

「…何の用だ。」

ブロリーはレクターにそう聞くと

「まあそう邪険にすんなって。それにしてもお前は大変だな。」

「大変？」

ブロリーが聞き返すと、

「あの子の事さっきから見てたけど、やっぱり何か悩んでるね。俺も声を掛けようとしたけどそこに君が現れたんだ。いやあ〜アフターケアも大変だね。」

レクターはそう言うと笑いながら歩いて行った。

「…気が普通じゃないな。」

ブロリーは小声で呟いた。

―翌日 中庭

授業終了後、クローゼは一人ベンチに座っていた。

「よっ、一人か。」

「あっブロリー。」

クローゼが返事をする、ブロリーはクローゼの横に座った。

「……」

座ったはいいが前日に一悶着があり、気まずい雰囲気のままお互い話しだすことが出来なかった。

そこに、

「ぜえぜえ…生徒会長はどこに行った？」

「レクターさん毎回すぐに消えるからなあ…」

ジルとハンスが息を切らしながら歩いてくる。

「おっ、ハンスとジルじゃないか。」

「あっブロリー…とクローゼさん。」

呼びかけで二人の存在に気づきジルとハンスが近づいてきた。

「そんな様子で…何があったんだ？」

「いや、そのだな…」

「生徒会長を見なかった？」

「「生徒会長？」」

二人は声を揃えて聞き返す。

「もしかしてレクターのことか。」

「ブロリー、知ってるの？」

クローゼが問いかけると、

「ああ昨日話しかけられてな、それで…」

ブロリーが途中まで答えると、ジルとハンスがいきなり頭を下げてきた。

「すまん！ブロリー！生徒会長が何かやったのならこの通り謝る！」

「だから許して！」

「お、おい俺は話しかけられたただだが…」

ブロリーがそう言いなおすと、二人は頭を上げて安堵したような表情となった。

「よかった〜ブロリーを怒らせたなら殺されるかもしれないって思っちゃたよ。」

「おい、それどついう意味だ…」

ブロリーは怒った表情になるが、ふとある事を不思議に思った。

「そうそう、生徒会長を探しているのか？」

「あ〜忘れてた！そうなのよ。まったくあの人がいなきゃ書類の片づけが出来ないって言うのに…」

ジルはそう言うため息を吐くが、

「代わりに俺が探してきてやろうか？」

「ブロリーが？無理だってあの人は俺達ですら探すのが無理なんだから。」

ハンスが言うとブロリーはニヤツと口端を吊り上げた。

「ぶ、ブロリー？」

「5分以内に連れてきてやるよ。」

そう言うとブロリーはクラブハウスへと向かった。

ブロリーは気の探知で屋根の上にレクターがいることに気がついた。

「まさか人前で飛ぶわけにも行かないしな。」

ブロリーは一人呟きながらクラブハウスの裏手に回った。

「…この辺でいいか。」

ブロリーは飛び上がり屋根に着地すると、案の定そこにはレクターが寝転んでいた。

「ぶ、ブロリー君！？そんな、ロープは見えないよう巻き上げていたのに！」

「さあ、来い！生徒会のお呼び出しだあ！」

ブロリーはそのままレクターの首根っこを掴むとそのまま地上に着地した。

3分後

「ほら、連れてきたぞ。」

ブロリーはレクターを三人の前に突き出す。

「仮にも俺はお前の先輩なんだぞ！？」

「そんなことを言える立場じゃないでしょ！」

ジルが一喝する。

「それにしてもすごいわね…本当に5分以内に連れてくるなんて…」  
「いやあ…」

褒められるとブロリーは素直に照れた。

「いや本当にすごいよ。じゃあブロリーそのまま会長を生徒会室に連れてきてくれ。」

「ああ、分かった。」

そう言うと三人は歩き出す。

「…」

「クローゼも行くぞ。」

「えっ、ちょっと!」

クローゼも引きずりながら。

―生徒会室

「……………」

そこには驚愕の顔をした男子生徒と女子生徒がいた。

「このレクターを…本当に君が？」

「ああその通りだが。」

プロリーはさも当然のごとく応える。

「まさかこんな逸材がいるなんて…ねえレオ。」

「ああ。」

男子生徒は一旦咳払いをすると

「君を生徒会に迎えたい！」

「「「「ええ〜！」「」「」

「ほづ…」

「プロリーを生徒会に入れるなんて…」

「嘘でしょ…」

「お前らは俺をどう思ってるんだ…」

「俺が逃げられなくなる…」

「いいじゃない、レクターにとっては。」

口々に言い合う生徒達。

「うむ、この馬鹿をすぐにとらえられる者はまずいないだろう。そこでだ、生徒会としては君をお招きしたい。」

「それだけの理由でか…まあいい。」

「了解してくれるのか？」

「だが一つ条件がある。」  
「条件？」

男子生徒はブロリーに聞き返す。

「そうだ。そのクローゼも一緒に入るならいいだろう。」  
「私が！？でも……」

クローゼに皆の視線が集まる。

「まあいいじゃない。これでレクターはすぐに見つけられるし、生徒会はにぎやかになるわよ。」  
「ふむ…そうだな。」

男子生徒は一呼吸置くと、

「ではブロリー君、クローゼ君。君達を生徒会に迎えよう！」  
「分かった。」  
「えと、あの……」

クローゼは慌てふためくが、

「そういえば自己紹介がまだだったな。私はレオだ。」  
「私はルーシーね。」  
「ブロリーだ。」

自己紹介が始まり雰囲気的にクローゼの番となる。

「あの……」  
「クローゼ。」



声のした方を見ると、ブロリーがクローゼをまっすぐに見つめていた。その姿を見たクローゼは、ハツとした気持ちになる。

「クローゼ・リンツです。これからよろしくお願いします。」

こうしてブロリーとクローゼは生徒会の一員となった。

## 第一章？（後書き）

ブローリーとクローゼが生徒会の一員になりました。

あと少しでFCまでの学園生活編を終えたいので、もっししばらくお付き合いです。

## 第一章？（前書き）

今回も長いです。

## 第一章？

ブロリーとクローゼが生徒会に入ってから、生徒会の業務が格段に速く進めるようになった。

「この会計まとめました。」

「おっ仕事速いね。」

クローゼは書類整理で活躍し、

「どこに隠れてるんだ。」

「そんな！？ゴミ箱の中なら見つからないと思ったのに…」

ブロリーは主にレクター検索で功績を挙げていった。

そんなある日、

「お、クローゼ…」

「先輩、どうしたんですか？」

レクターはクローゼを見かけると近づき封筒を手渡した。

「これって…」

「ルースン市長に提出しなきゃならないらしくてな。代わりに行ってくれ。」

そう言つとレクターは走り去ろうとした。

「ちょ…これって先輩の仕事じゃないんですか!？」

「何を言う。俺の仕事はブロリーから逃げ…」

「俺がどうしたんだあ…?」

レクターが言い終わる前に、ブロリーはレクターの腕を掴みあげていた。

「ぶ、ブロリー!?!今日は資料の片づけが忙しいはずじゃないのか!?!」

「フンツ、そんなもの既に終わらせている。…副会長の命令だ。さあ来い!」

「嫌だあああああ!」

ブロリーはそのままレクターを引きずって行った。

「ふう…毎度会長の抵抗は凄まじいな。」

「お疲れ様。」

クローゼがねぎらいの言葉を掛けると二人は少し笑った。

「で、どうしたんだ?」

「あ、そうだ。先輩にこの封筒をルーアン市長に渡すように、って言われたんだけど…」

クローゼは封筒をブロリーに見せる。

「一人でか？まったくあの会長は…」

「そうなの、でも最近海道に魔獣が出るって言うし…」

クローゼがそう言うとブロリーは少し考えた後ある提案をした。

「俺もついて行ってやるうか？」

「え、でも…」

「なに、会長なら今頃生徒会室から出られないさ。」

クローゼはそれを聞くと、

「じゃあ一緒に行きましょうか。」

「ああ。」

二人は門へと歩いていった。

「何とか渡せたな。」

「ええ、そうね。」

二人は既に市長に封筒を渡し終え、今ルーアンの北口に立っている。

「しかしあのギルバートって秘書は何か信用が出来なさそうだった

たなあ。」

「そう？私にはいい人に見えたけど…」

二人は会話をしながら海道へ出て行った。

学園とマノリア村への分かれ道にまで来ると、赤髪の少年が道に伏せていた。

「あら…どうしたの？」

クローゼが少年に話しかけると、

「ちょっと探し物してるんだ。」

「「探し物？」」

二人は聞き返す。

「うん、赤い石…すげーきれいなんだ。ここら辺で落としたんだけど…」

少年は涙目で答える。

「えと…私達も一緒に探していいかな？」

「達？俺もか？」

「いいじゃない少しぐらい。」

「え、でも…」

少年は少し遠慮がちになるが、

「皆で探せばすぐに見つかるよ。」

クローゼが優しく微笑みかけると、

「うん…じゃあよろしくな。」

少年は了承してくれたようだ。

「じゃ、始めましょうか。」

「まあいいか。」

三人は赤い石を探し始めた。

5分後

クローゼは綺麗な赤い石を見つけた。

「ねえ…ひよっとして、これかな？」

クローゼは少年に確認を取る。

「う、うん。…これ…」

そう言うとクローゼは少年に石を渡した。

「ふふ、よかったね。」



「ああ、まったくだ。それにしてもクローゼはよく見つけたな……ッ  
！全員避ける！」

ブロリーは叫ぶと二人を抱えて道の端へと飛んだ。

「な、何すんだよ……って。」

「魔獣……」

三人を襲ったのはナイトアンモ、大型で強固な装甲を持つ魔獣である。

「そんな、こんな大きさの……」

クローゼは怯えた声で言うが、

「なあクローゼ、何で俺が学園にいるんだったか覚えているか？」

「ちよつと、こんな時に……」

「お前の護衛だ。」

ブロリーはそう言うと魔獣の腹部を殴る。

「ギイイイイ……」

その一撃で装甲が貫かれ、魔獣はつめき声を出す。

「じゃあな。」

ブロリーはそのまま魔獣を掴み上げ海へと投げ飛ばした。

「ひ、ひえ〜すげえな兄ちゃん！」

「こんなもの朝飯前だ。」

ブロリーは軽く答える。

「でも、こんなところにまで魔獣が現れるなんて…」  
「危ないな…」

するとクローゼは何か閃いたらしく、

「私達でこの子を送りましょうよ。」

「まあそうなるな。」

「ね、いいでしょう。ええと…」

「…オイラ、クラム。」

「クラム君、お家まで送るよ。ね？」

「うん…」

クラムは素直に頷いた。

「あ…」

二人はクラムに案内され、その場所の前にまで来た。するとクローゼは小さく声を漏らした。

「?どうした?」  
「ええっと…」

ここはマーシア孤児院。クローゼが昔世話になった場所。クローゼは少し物思いに浸ってしまっ。

「おいクローゼ。」  
「は、はい!」

思わずブロリーの声に驚いてしまっ。

「一体どうしたんだ?」  
「い、いえ何も…」

クローゼは少し慌てながら答える。

(今なら大丈夫…かな…学園にも慣れたし、友人も出来たし…ブロリーもいる)

「ね、ねーちゃん??ぐあい、悪いの…?」  
「ううん、大丈夫。クラム君。中を案内してくれるかな?」  
「うん!まかせとけっ!」

クラムは元気良く返事をする二人を率いて行っ。

建物の扉を開けると、中には厳しそうな、それでいて優しそうな顔

をした女性がいた。

「あらクラム、どこへ行っていたのですか？もうみんなはとっくに…」

クラムを叱ろうとした女性は後ろにいる二人に気がついた。

「あら？あなたは…もしかしてクローゼ？」

女性はクローゼに微笑みかける。

「そしてそちらの方は…」

「ああ、俺はプロ「テレサ先生ツ！」！？」

ブロリーが言い終わる前にクローゼは女性に抱きついた。

「せ、先生、あの…わ、わたし…」

「あらあら、泣き顔は変わってないんですね。」

「だ、だって…」

クローゼは女性の胸に顔をうずめる。

「へ…！？」

「何がどうなってるんだ…」

呆然となるブロリーとクラム。しばらくするとクローゼは女性から離れた。

「す、すみません。取り乱してしまって。私、嬉しくてつい…」

「クローゼ…ふふ、お帰りなさい。」  
「はい！」

クローゼは目をこすりながら答える。

「クラムもお帰りなさい。そしてあなたは…」

「え、あ、ああ、ブロリーだ。」

「初めまして。私はテレサ。ここの院長をしています。」

女性は軽く自己紹介をする。

「あの、テレサ先生。ジョセフおじさんはどちらに…？」

「…主人は…亡くなりました。もう4年になるかしら…」

「…え…」

クローゼは目を見開く。

「…外にでしょうか？」

「いえ、別に構いません。」

テレサは続ける。

「ルーアンに買出しに行ったときに事故に巻き込まれ…」

「…っ！」

それを聞いた瞬間、クローゼは後ずさる。

「う…うめんなさい…」

「…どうして謝るの？」

テレサは聞き返す。

「私…わたし…何も知らなくて…つまらない意地ばかり張って…ここが大好きだったのに…」

「クローゼ…」

後ろで聞くブロリーは少し顔を歪める。

「来ちゃいけない、なんて…勝手に思い込んで…！もっと、もっと早く来ていれば…っ！…！」

クローゼは再度目に涙を浮かべる。すると、

『きやはは！』

『なによもお〜！』

「…え……………」

クローゼは小さく、小さく声を漏らす。するとそこに三人の子供が二階から降りてきた。

「あ、クラム！どこに行ってたのよ、もー。」

三人はクローゼに近づいてくる。

「ねーちゃ、どおして泣いてゆ〜？」

「え？あ…あの…」

クローゼはしどろもどろとなる。

「ふふ、今私が世話をしている子供達です。ほらみんな挨拶をして？」

「……はい」「」

三人は口を開く。

「マリイです！」

「ポーリイだよ」

「僕ダニエル！」

「……」

クローゼは呆然となる。

「クローゼ？マーシア孤児院はここにあるのですよ？」

「……あ……はい！」

クローゼは大きく返事をした。

「丁度時間もいいようですし、お茶にしましょうか。…ブロリーさん、そろそろ入ってきてきて。」

「あれ…？」

クローゼが後ろを振り向くと、何ともいえない表情でブロリーが扉を開けた。

「ここにいたんじゃないの？」

「いや、俺はああいう空気が苦手なんだ…」

ブロリーがそう言うとクローゼとテレサは少し笑った。

「フフ：あなたはいい人のようですね。さ、クローゼ手伝ってください。」  
「はい！」

クローゼは返事をした。

くおまけ

「うわあ、大きい！」  
「こら！そんな所を触るんじゃない！」

少し子供が嫌いになるブローリーであった。



## 第一章？（後書き）

どうも最新話です。

ちよつと内容的にただ辿つてる感じもしますがお許し下さい。  
オリジナルの話とはいかなくても、いずれオリジナルの展開はしま  
すので、その時までどうかご容赦下さい…

## 第一章？（前書き）

今回でFCまでの学園生活編は終わりです。長かった…

## 第一章？

「それにしてもクローゼはあんな泣き顔をするんだなあ…」

「ちよ、ちよっとブロリー！」

「フフ…」

今ブロリーとクローゼ、テレサはテーブルを囲んでお茶を楽しんでいる。

「それにしてもあなた達は仲が良いですね。一体どんな関係なのかしら？」

「か、関係ってそんなはっはっはっ、なーに大した関係じゃねえよ。」

「…」

ブロリーが笑いながら答えると、クローゼはブロリーを睨んだ。

「ど、どうしたんだクローゼ…」

「何も！」

ブロリーは動揺したが、すぐに話を変えようとする。

「それにしてもこの紅茶はうまーねーねーブロ兄〜」だから触るな  
といってるだろうが！

ブロリーは子供達に触られ恫喝した。

「子供たちはブロリー君が気に入ったようですね…」

「ええ、そうですね。」

二人は微笑みながらその光景を見る。

「それにしてもここは何も変わらないですね。いつまでもここにいたいです…」

クローゼがそう言った瞬間、子供達をあしらうブロリーの動きが止まった。

「どうしたのブロリー？」

「いや、何も…「ねえねえ」だから向こうに行け！」

そうして孤児院での一日が終わった。

孤児院に行つてからというもの、クローゼは休日になってはブロリーを引きつれ孤児院に向かうようになった（ブロリーは嫌がっているが、あくまでも護衛という役目があるため）。

「今日も行くのか…？」

「いいじゃない！楽しいでしょ？」

「はあ…」

そうしてこの日も孤児院に行くこととなった。

―夜

「ふふ、また遅くなっちゃた。」

「いつまで話すつもりだったんだ…」

「まあまあ…孤児院に行くと、ついつい長居してしまうのよね。」

「俺も長居することになるんだが…」

二人は学園の門の前にまで来ていた。

「それよりも早く寮に戻らないと…」

「ああ。」

そう言うと二人は各自の部屋へと向かった。

―女子寮

「ふう…ジルはもう寝ちゃったかな…」

クローゼとジルは相部屋である。そのおかげで二人が仲良くなったこともあるのだが、

「あ、あれ…？真っ暗…」

クローゼが部屋の扉を開くと、部屋の明かりは消されていた。

「やっぱり寝ちゃったんだ…クローゼ」ひゃあ！

クローゼが部屋を見渡していると、部屋の明かりが急にともされジルの低い声でクローゼを驚かせてきた。

「お〜か〜え〜り〜」

「じ、ジル！？お、驚かさないで下さい…」

クローゼは内心ビビりまくりである。

「さて、今日は一体どこに行ってたのかな？」

「じ、ジル…？」

ジルはクローゼに顔を近づけてくる。

「毎週毎週休日になったらブロリーと二人つきりで…どこに行ってるんだ！」

「ひゃ、ひゃい！えと、あの…知り合いの家です…」

「知り合い？ほほう…知り合いの家ね…」

「じ、ジルさん…？」

クローゼは後ずさる。

「知り合いの家に二人で挨拶しに行ってるんだ…もしかして…」  
「あ、あの…多分ジルが思ってることは違うと思いますけど…」  
「ほ…う、じゃあ言ってみなさい!」  
「マーシア孤児院です。」  
「へ? 孤児院?」

ジルは意外な答えにキョトンとする。

「はい。以前お世話になったことがあって…二人でお手伝いに行ってるんです…」

クローゼが説明すると、

「なんだ孤児院かあ…ちえっ、残念。でもクローゼらしいかな。」  
「…え?」

クローゼもキョトンとなる。

「うんうん、可哀想な子供達の世話をするなんて、献身だねえ。」  
「…」  
「まさかブロリーもするなんて…よっ君達は優等生だ」

ジルはからかうように言う。が、

「…かつ…」  
「???」  
「可哀想じゃありません!」  
「…へ?」

予想外のクローゼの大声にジルは唖然となる。

「あ、あの子達は“可哀想”なんかじゃありません。それに私は献身しているわけでもない！」

クローゼは続ける。

「失礼します！」

クローゼはそのまま部屋から出て行った。

「クローゼ……」

一人残されたジルは落ち込む。

「また悪い癖が出ちゃった、かな……」

クローゼは男子寮のブローリーの部屋の前に来た。

（何でここに来ちゃったんだろう……）

クローゼは考える。



(そついえばブロリーはどう思ってるんだろつ…もしジルと同じだったら…)

クローゼはそう思いながらノックをしようとするが、

『どうした、クローゼ?』

ノックをする前に中からブロリーの声が聞こえてきた。

「…」

クローゼはそれを聞くと扉を開けて部屋に入ってしまった。

「どうしたんだこんな時間に?」

「…」

クローゼは座っているブロリーの前にまで歩いてきた。

ブロリーの部屋は3人部屋で1人で使っているが、体の大きさもあって本人にとってはそれほど広く感じない。

「あの…」

クローゼはブロリーに事の顛末を話した。

「私は、ずっと憧れていた。普通の生活とか、家族とか、友達とか

「…」

ブロリーは静かに聞き入る。

「…でも、そんなにうまく行かない…私はジルさんの事も大切に思ってる。でも…同情とか…献身とか…そんな理由じゃなかった。あの場所はそんなのじゃない。…哀れみなんていらぬ。ただ…あそこにいるだけで温かった…」

クローゼは更に続ける。

「私は優等生なんかじゃない。私はただ…家族でありたかった!!」

クローゼは息を吸い込み、

「私は間違ってない!!…ブロリーはどう思っているの?」  
「…」

ブロリーは口を開く。

「案外ジルと同じかもしれないな。」  
「!?!」

クローゼはブロリーを睨む。

「さつきから聞いてりゃ何?自分が間違っただと?」  
「それは…!」

ブロリーは続ける。

「皆が皆、お前の事を知ってるわけでもない。ましてお前であるわけ無いのだからお前の考えが理解できるわけもない。」  
「…」

クローゼは下を向く。

「…もう遅い。ジルと顔を合わせたくないんだろう？今日はここに泊まっていけ。」

「え？」

クローゼは聞き返す。

「俺は外で寝る。…じゃあな。」

「ブロ…！」

言い終わる前にブローリーは外に出て行った。

「…ん？」

部屋から出ると、扉の前にハンスとレオがいた。

「どうしたんだ二人して？」

「あはは…」

「…俺達も外に追い出されたんだ。」

何？と思って二人の部屋の気を感じると、そこにはジルの気があった。

「…ああ…そうか…じゃあ三人で廊下で寝るか。」

「…ああ」

こうして三人は廊下で寝ることになった。

一日

「起きろクローゼ」

「ふあいー！」

ブロリーは部屋にはいるや否や、ベッドからクローゼを引き摺り下ろした。

「ぶ、ブロリー…！」

「マーシアに行くぞ。」

「え…ちょ、ちょっと…！」

ブロリーはそのままクローゼを引きずっていった。

ーマーシア孤児院

今二人は2階の子供達の寝室にいる。途中テレサに出会ったが、軽い挨拶を交わすとテレサは買出しに出かけていった。

「こんなところにつれてきて…どうしたの？」

「見る。」

ブロリーが指を差した先には、

「かわいい…」

子供達の寝顔があった。

「フン、そうか。」

「ええ、本当。幸せそうな顔…」

クローゼは寝顔に見とれている。

「だが、ここは孤児院、そしてこいつらは孤児だ。いかにこいつらが幸せそうに見えてもその事実が変わらん。」

「…うん。」

ブロリーは続ける。

「何も知らん奴は可哀想というかもしれん。お前は似た境遇なのだ

から怒るのも無理は無いな。」

「…どこで知ったの？」

クローゼは問う。

「…女王様から聞いたよ。お前の両親も亡くなったってな。」

「…うん。」

ブロリーは答え、

「お前はあの子達に自分を映していたのかもな。それでムキになったってわけだ。」

「うん、その通り…」

クローゼは静かに言う。

「私は可哀想って言われなくなかった。…私が言われなくなかった。私はやっぱり…ここに居る子供達を想って怒ったんじゃない。」

クローゼは続ける。

「私はあの時、自分のために怒った。そして優等生とか献身とか、そんな言葉に苛立った。…偽善だよ。私だめだよ。」

そう言うと

「そうでもないさ。」

「…えっ。」

思わずクローゼは聞き返す。

「色んな考えがあつてお前の考えもある。お前にも触れられたくない部分があるのだろうか…それに気づけばいいんじゃないか？」  
「あ…」

クローゼはブロリーの顔を見上げると、

「フフ、ブロリーに慰められちゃった。」  
「フンッ。」

ブロリーはそっぽを向く。

「私も今回のことで、少し気持ちの整理が出来たみたい。」  
「そうか…」  
「うん。ブロリー、ありがとう。」  
「…ああ」

クローゼは大きく伸びをすると、

「紅茶、淹れてくるね。」  
「頼む。」

そう言うと二人は1階に降りていった。

降りると扉からノックをする音が聞こえてきた。

「誰かしら？」  
「…お前が開けてやれ。」  
「??？」

そう言われるとクローゼは扉を開ける。そこにいたのは、

「ジル？」

「あ…クローゼ。」

ジルが外に立っていた。

「あの…」

「立ち話もなんだし…中に入る？」

「あ、うん…お邪魔します…」

ジルは中に入って行った。

その後、クローゼとジルは仲直りをした。

―数カ月後

学園長室、生徒会室にレクターの退学届けがあった。



「何でこんな時に…。」

「先輩…。」

「ふう…。」

学園の外の大木にレクターは寄りかかっていた。

「今頃大騒ぎだろうな。」

「そうだな。本当にそうだ。」

声のした方を振り返ってみると、そこにはブロリーがいた。

「何だ？今回も連れ戻しに来たのか？」

「フン、退学届けを出した奴を連れ戻す気は更々ない。」

ブロリーがそう言うとレクターはクツクツと笑った。

「そうかい。ありがたいな。」

「まあお前にも色々な事情があるのだろうか…“仕事”には気をつけるよ。」

「!？」

そう言われるとレクターは身構えた。

「…知ってたのか？」

「いや、今のはカマをかけたただけだが…本当だったんだな。」

レクターはやられた、と一瞬思うがすぐにいつもの軽そうな顔にな

るよ、

「ちえ、ばれちゃったか。まあいいや。…ブロリーも“護衛”はし  
っかりやれよ。」

そう言つとレクターは走り去っていった。

「あいつ…」

ブロリーはその後姿を見つめていた。

## 第一章？（後書き）

ようやく終わりました。これでやっとFCに入れます…

クローゼへの説得ですがこんな感じでもかっただすかね？少し弱い気もしますが、どうかご勘弁を…

では、今回はこの辺で。これからもよろしくお願いします。

## 第一章？（前書き）

FC主人公Sが登場です。

## 第一章？

12年後、

ブロリーと心が吹っ切れたクローゼは学園生活を楽しく謳歌していた。

先輩達が卒業した後ジルが生徒会長になり、テストではブロリーとクローゼのトップ争い、学園祭、さまざまな行事が彼らを迎えた。

1そして今、

「ふう…やっぱり先生のハーブティを飲むと落ち着きます…」

「フフ、そうですか？」

「ああ、これはうまい…」

ブロリーとクローゼは孤児院の1階でテレサの紅茶を楽しんでいる。クローゼはあの一件があった後、変に気負うことが無く孤児院に向かえるようになった。

「先生のハーブティにはまだまだ追いつけま『離せっ、離せってばくっ』！今の声は！」

「お、おいクローゼ！」

叫び声が聞こえるや否やクローゼは外へと出て行った。

「い、一体何が！」

「…いや、何も悪い気は感じない。安心しな。」  
「そ、そうですね…」

ブロリーはこの孤児院の事実上迷子捜索の担当となっている。前々から行方をくらませるクラム、その前まではレクターをすぐに見つけられたブロリーを不思議に思ったクローゼとテレサが問い詰めたところ、気のあるをとうとうばらしてしまい、その役目を押し付けられている。

「どうせまたクラムが馬鹿をやったんだろう。」

「まあ…そうですね」その子から離れてくださいっ！』ほ、本当に大丈夫ですかね…」

「はあ…」

ブロリーはため息を吐きながら立ち上がる。

「行ってくれますか？」

「ま、ここまでの騒ぎになったらしょうがないだろ？それじゃあ見てくる。」

そう言うとブロリーは扉を開けて外に出た。

外に出てみると亜麻色の髪をツインテールにした女性がクラムを羽交い絞めにしており、その様子をクローゼと黒い髪の、琥珀色の目をした男性が眺めているという奇妙な状況だった。

「…何だこれは？」

「あ、ブロリー。」

ブロリーが来たことに気づくとクローゼは苦笑いをした。

「一体どうしたんだ？」

「あのですね…」

「オイラは何もやってない！この乱暴女が言いがかりをつけてきたんだ！」

「誰が乱暴女ですって〜！」

クラムが苦し紛れの言い訳をすると、ブロリーはクラムをまっすぐに睨みつけながら言った。

「本当にやってないんだな…？」

「う…や、やってないよ…」

言葉が尻すぼみになりながらクラムは答える。

「もし嘘をついていたら…魔獣みたいになるぞ。」

「ヒィー！」

その言葉でクラムは涙目になる。そしてその光景を見る者達は、

（な、なんて迫力なの〜！）

（…すみません、あの方は？）

（あはは…私の同級生です）

小声で話す外野陣。

「…ごめんなさい…本当はこのバッジをとりました…」

白状するクラム、

「よし、よく言えたな。だが謝るのは俺にじゃないだろ。」

「うん…」

クラムは女性のほうを向くと、

「ごめんなさい…」

頭を下げて腕章を返した。

「わ、分かればいいのよ。」

「でも君も不注意だったね。まさかこんな子にとられるなんて…」

「あんたは黙ってなさい！」

女性と男性は言い争いを始めた。

「あの…ここで立ち話もなんですし…中でお茶はいかがですか？」

「はい？」

二人はつい聞き返す。

「でも悪いですよ。」

「そんなこと無いです。実際この子が迷惑を掛けたことですし…」

「そうだ、お詫びとっては何だがぜひ中に入れてくれ。ここのお茶はうまいんだ。」

クローゼとブローリーに誘われた二人は、

「ん…じゃご馳走になろうかな？」



「まったく君は…それじゃあお邪魔します。」

了承したらしく、中へと入っていった。

中に入ると、テーブルを囲んで四人とテレサで紅茶を片手に軽く自己紹介をした。

亜麻色の髪の女性はエステル・ブライト、黒髪の男性の名はヨシユア・ブライトといい、今年就任した新米“準”遊撃士らしい。どうやら正遊撃士になるために国中を回るそうだ。

それと先程の騒ぎについても聞いてみた。やはりクラムが原因であり、マノリア村でエステルの腕章を取った後孤児院にまで逃げてきたようだ。

「そうですね…そんなことを。本当に申し訳ありませんでした。保護者としてお詫び申し上げます。」

「もういいですよ。美味しいハーブティでチャラということぞ！」

エステルは機嫌を治したようだ。

「それにしてもブロリーさんは大きいですね。何かやってるんですか？」

「さんはいい。そうだな…俺は武術を少しかじっている。」

「へー、それと何でここにいるの？」

「私達はその学園の生徒なんです。寮生活なので休みの日にはこちらへ遊びにいけるので…」

「へ、こちら辺で学園って…、もしかして…」

「ジェニス王立学園ですか？」  
「はい、そうです。」

しばらくの間、とりとめも無い話に話を咲かせた。

1時間後、

「いやあ〜ご馳走様でした。」

「うん、本当においしかったね。」

「フフ、先生に伝えておきますね。」

エステルとヨシユアはルーアンに用事があるらしく、もう出掛ける  
そうだ。

「そういえばルーアン市に行かれるんですね？」

「うん、ギルドの支部で転属手続きをするつもりなの。」

準遊撃士は各地の支部に所属して活動することになっている。そのため活動地域を変える際にはその地のギルドに転属手続きをしなければいけないことになっている。

「ルーアンのギルドでしたら私、何回行ったことがあります。よ  
かったら案内しましょうか？」

「……へ？」

三人が声を揃えて聞き返した。

「ブロリーまで何を言ってるの？」

「また俺も行かなくちゃだめか…」

「当たり前じゃない。」

「でも君達の方は大丈夫？すぐに学園に戻らなくて？」

ヨシユアが気遣って確認をするが、

「はい、今日一日は外出許可を貰っていますから。夜までに戻れば大丈夫です。」

「俺も夜まで外にいることになるんだけどな。」

ブロリーがそう言うとクローゼはキツ、とブロリーを睨む。するとブロリーは少したじろいしてしまう。

「あはは、じゃあ頼もうかしら。」

「はい。それじゃついてきて下さい。」

「はあ…」

四人はルーアンのギルドへ向かった。

今、四人はルーアンの北口まで来ている。そこからはルーアンの大体の全貌が眺められるため、

「うわあ〜ここがルーアンか。なんというか、キレイな街ね。」

「海の青、建物の白：眩しいくらいのコントラスト。まさに海港都市って感じだね。」

「ふふ、色々で見所の多い街なんです。」

「その中でも1番の見所はラングランド大橋だな。」

「ラングランド大橋？」

エステルは聞き返す。

「北街区と川を挟んで南街区を結ぶ大きな橋だ。巻き上げ装置を使った跳ね橋だから見物だぞ。」

「さっきまでついてくの嫌だったくせに嬉々と話すわね〜」

「ほっとけ。」

エステルはニヤニヤとブロリーを小突いてくる。

「それよりも早くギルドに行こうか。」

「あ、はいそうですね。では、こちらです。」

四人はギルドへ向かった。

ーギルド前

エステルとヨシユアは転属手続きを終え、ギルドの前で立ち話をしている。

「もういいのか？」  
「うん、もう手続きも終わったし…観光でも楽しもうかな。」  
「…遊撃士なら依頼があるんじゃないのか？」  
「いや、今は新規の依頼は無いから実際今は自由時間なんだ。」  
「それじゃあ私達がこのルーアンを案内しますね。」  
「そこまでしてくれるの！？ありがと〜」  
「フン…」

ブロリーとクローゼによるルーアン案内が始まった。

ラングランド大橋、礼拝堂、ホテルブランシュ、市長邸…と一通り見回った四人は橋の南側に集合していた。

「いやあ〜ルーアンって活気があるね。」  
「そりゃあ貿易で成り立ってる街だからね。活気が無かったらとてもやっついていけないよ。」  
「しかし最近では空輸が多く貿易量が減ってきてるんですよ。」  
「そうなんだ…」

クローゼがルーアン講義に花を咲かせていると、

ドシッ、

「あ、ご、ごめんなさい…あゝ帽子があゝ。」

突っ立っていたブロリーに少女がぶつかり、その反動で帽子がころころと風に吹かれ転がっていった。

「おとと…すまない。ちょっと取ってくる。先にどこかに行ってくれ。すぐに追いつく。」

そう言うとブロリーは少女と共に走り去ってしまった。

「あ、ブロリー…ってしょうがないね。じゃあ次はこっちに行ってみましょうよ！」

「あ、エステルさん、そっちは…」

「…行っちゃったね。」

エステルが走り出すと共に残った後の二人もその後ろを追いかけteいった。

## ―倉庫前

「何か柄の悪いところねえ…」

「シッ、そんなこと言っちゃだめだよ。」

倉庫はゴロツキの溜り場となっており、地元住民との衝突もしばしば起こっている。更には最近ゴロツキが集団となりグループを形成

しており、

「待ちな、嬢ちゃんたち。」

後ろから声がすると、三人の男達がエステル達に近づいてきた。

「おっと、こりゃあ確かにアタリみたいだな。」

「珍しく女の声が聞こえてきたと思えば……」

「あの、何か御用でしょうか？」

クローゼが問う。

「へへへ、さつきからここらをブラついてるからさ。」

「暇なんだったら俺達と遊ばないかなって。」

男達はへらへらと答える。

「え、えと……」

「何よ、今時ナンパ？」

女性陣は汚いような物を見るような目で見つめ返す。

「へへへその通りさ。そんな生つちろい小僧なんか放つといて俺達と楽しもうぜ。」

「……」

ヨシユアは啞然とする。

「ちよ、ちよっと！何が生つちろい小僧よ！？あなたたちみたいな  
ド素人、束になってもヨシユアには……」

エステルは必死に弁解しようとするが、

「いいよ、エステル。別に気にしてないから。君が起こつても仕方がないだろ？」

「でも……」

「なに、このボク……余裕かましてくれんじゃん。」

「むかつくガキだぜ……」

「へへ、世間の厳しさってヤツを教えてやる必要があるそうだねえ。」

「

そう言うと男達はじりじりと三人に近づいてくる。その時、ヨシユアは口を開いた。

「やめたほうがいいよ。」

「ああ？お前この状況をよく分かってんのか？」

「いや、だって後ろ……」

「ああ!？」

男達が眉間にしわを入れながら後ろを振り返ると、そこには、

「……」

「……ヒイツ!」「」「」

鬼のような形相をしたブローリーがいた。

「まったく帽子を拾ってから追いついてみれば……スマンなヨシユア。」

「

「いや、いいよ結局無事だったんだし。」

「



二人は余裕の雰囲気醸しながら話す。

「お前ら人をなめるのも大概に…「何い？」イヤスイマセンナニモ  
イッテマセン。」

ブロリーの気迫に押され、男達は黙ってしまった。

「お前らこいつらに手を出そうとしたのか？」

「…いや滅相ありません。」

「もし危害を加えようとするならば…」

「…」

ブロリーはさらに顔を強張らせる。

「お前らが明日を拝めらなくなると思え！」

「…「すみませんっした〜！」」

男達は走り去ってしまった。

「ブロリー、ありがとう。」

「いやいや、遅れた俺が悪いんだ。こっちもスマンな。」

「それにしてもすごい迫力よね。人がまったく近寄れないじゃない  
！」

「…喜んでいいのかそれは…」

ブロリーがため息混じりにそう言うと、

「君達大丈夫か！」

青髪の男がこちらへ走ってきた。

「あ、ギルバートさん。」

「クローゼ君にブローリー君、そしてその二人は…まあいい。とにかく大丈夫なんだね!？」

「え、ええおかげさまで。」

四人は詰め寄ってくるギルバートに少し引きながらアピールする。

「まったく通報があつた時は本当に困つたよ…」

さらに威厳がある男性もこちらに向かってくる。

「あ、市長!」

「市長?」

市長という言葉にエステルとヨシユアは聞き返す。

「いかにも。私がこのルーアン市の市長、ダルモアだ。それよりも済まなかつたね。街の者が迷惑をかけてしまった。」

そう言うとダルモアは頭を下げる。

「い、いえいえ。こうして大丈夫だったわけですし…それに私達は遊撃士ですから。」

「ほう遊撃士。」

「はい。ロレント地方から来た遊撃士のエステルっています。」「同じくヨシユアといっています。」

二人も自己紹介をする。

「そういえば、受付のジャン君が有望な新人が来ると言っていたが…ひよつとして君達の事かね？」

「えへへ…有望かどうかは判らないけど。」

「しばらくルーアン地方で働かせてもらおうと思っています。」

「おお、それは助かるよ。今、色々大変な時期だね。君達の力を借りることがあるかもしれないが、その時はよろしく頼むよ。」

「はい。」

エステルとヨシユアは返事をする。

「ところで、そちらのお二方は王立学園の生徒のようだが…」

「はい、王立学園2年生のクローゼ・リンツと申します。」

「同じくブロリーです。」

ブロリーとクローゼも名乗る。

「そうか、コリンズ学園長とは懇意にさせてもらっているよ。それに今度の学園祭は私も非常に楽しみにしている。どうか頑張ってくれたまえ。」

「はい、精一杯頑張ります。」

「うむ。それじゃあ私達は失礼するよ。先程の連中が迷惑をかけたら私の所まで連絡してくれたまえ。ルーアン市長としてしかるべき対応をさせて頂こう。」

そう言うとダルモアとギルバートは市長邸へと去っていった。

「うーん、何て言うかやたらと威厳がある人よね。」

「確かに、立ち振る舞いといい市長としての貫禄は十分だね。」

「俺はあんまり信用できないが…」

「そんな事言わないの。それとダルモア家といえばかつての大貴族

の家柄ですから。いまだに上流階級の代表者と言われている方だそうです。」

「ほえ〜…なんか住む世界が違っわね。」

エステルは素直に感心してしまっ。

「それよりもそろそろいい時間だ。そろそろ戻るか。」

「それもそうね。じゃ、戻りましよう。」

そうして四人はギルドに戻って行った。

## 第一章？（後書き）

最近まとめようとするといついついあと少し、あと少しといつてどんどん長くなってしまいます。

誰か私に纏める力を分けて下さい…

第一章？（前書き）

今回も長いですが

## 第一章？

「夕方

日も大分沈んできた頃、ギルドの前にまで来るとブロリーとクローゼ、エステルとヨシユアは向かい合わせに立った。

「それでは私達はそろそろ学園のほうに戻ろうと思います。」

「急いで帰らないと色々めんどくさいからな。」

「あ、学園には門限があるんだね。」

「うーん…名残惜しいけど仕方ないか。」

三人は小さくため息を吐く。

「今日は付き合わせてもらってありがとうございました。」

「えへへ、やだな。お礼を言うのはこっちだってば。」

「そうだね。案内してくれてありがとう。」

口々に礼の言葉を述べる。その時クローゼは何か思い出したらしく、

「そうだ、お2人はしばらくルーアン地方にいますよね？よかったら、来週末にある学園祭にいらっしやいませんか？」

「ガクエンサイ？」

聞き慣れない言葉にエステルはつい聞き返してしまう。

「名前から察するに何かの行事みたいだね。」

「ええ、学園側の許可を貰って生徒が自主的に開くお祭りです。王立学園の伝統行事なんですよ。」

「あ、そーいうのあたしメチャメチャ好きかも！」

「なら来た方がいい。調査発表はもちろん、出店に演劇もやるぞ。」

「行く行く、ぜーったい行く！ていうかあたし達も一緒に祭りの準備がしたいくらい！」

エステルは今にも飛び上がりそうな勢いではしゃぎ出す。

「ちょっとエステル…これからは忙しくなるって聞いてなかったの？」

ヨシユアがジト目でエステルを見る。

「うう、それがあつたか…」

「まあ、当日だけならいい息抜きにもなると思つし…それまでしっかり仕事しようね。」

「ふあ〜い。」

ヨシユアに諭される様子を見ていたクローゼとブロリーはクスクスと笑つ。

「エステルさん、ヨシユアさん。それでは私達、そろそろ失礼しますね。」

「また会おう。」

そう言うと2人はルーアンから出て行った。



学園の門の前にまで来た二人は会話をしていた。

「ねえ今日は楽しかったね。」

「…まあな。」

「フフ、まったく素直じゃないんだから。」

クローゼは悪戯するような雰囲気でもブローリーに言う。

「それじゃあこの辺でね。おやすみ、ブローリー。」

「ああ、また明日。」

二人は自分の寮へと帰っていった。

― 男子寮

ブローリーは今ベッドに腰掛けている。普通生徒は授業が難しいので休日でも勉強をするのだが、ブローリーは授業を聞いただけで大体の内容を理解できるので、勉強らしい勉強はテストの前にしかない。

「はあ…お前は何で勉強しないんだ…?」

「お前みたいに要領が悪くないからだ。」

「何を、ちくしょお。」

ブロリーの目の前の机で勉強するのはハンス。先輩であるレオが卒業した際ハンスも部屋に一人となってしまい、それではもったいな  
いという事でブロリーの部屋へと引っ越してきた。

「ちよつと勉強を教えてくださいよ」

「ん？いいぞ。」

ハンスからの呼びかけに軽く応え、勉強を教えるブロリーであった。

―深夜

「よし、この辺で終わりとするか。」

「おお…俺スゲー頭が良くなった気がする…」

ブロリーの教え方が非常にうまく、ハンスの頭は内容をサクサクと  
理解できた。

「フン、そんなもの“気がする”だけだ。お前はすぐに忘れるから  
な。」

「よくも言いやがったな…そら！」

ハンスは遊び半分にブロリーに殴りかかる。

「その程度の突きでこの俺に当てられると思っていい…ん？」

「どつしたブロリー？」

急に動きを止めたブロリーを不思議に思うハンス。

「いや…ちょっと静かにしてくれ。」  
「あ、ああ分かった。」

いつにない雰囲気のプロリーにたじろぎつつも、おとなしくハンスは指示に従った。

（…気が乱れているな。小さな気が5つ。そしてこの方向は………！）

プロリーは何か気づくとドアの前にまで一瞬で跳躍する。

「おいハンス！」

「お、おう！」

「少し出かける！しばらく帰らんから適当に言い訳してくれ！」

「わ、分かった！」

ハンスに命令するとプロリーはそのまま外へと飛び出していった。

「何だ？孤児院に何が起こってるんだ？」

プロリーは門を飛び越え学園の外に出ると、そのまま空に浮かび孤児院へと飛んで行った。

― 孤児院

上空から見るプロリーの瞳には、周りの暗闇とは反対に、光を撒き

散らしながら燃え盛る孤児院が映っていた。

「なんてことだ…いや、それよりみんなは!」

ブロリーは気の探知を始める。すると孤児院の中から5つ小さな気を発見した。

「!まずい!」

ブロリーは孤児院の扉の前にまで飛んでいくと、そのまま扉をこじ開ける。そこには小さく固まる4つの影に女性の影、さらに一つの大柄な影を発見した。

「お前…誰だ!」

ブロリーは男に問いかけるが、

「話は後だ!今からそっちに子供達を投げる!」

そう言うと男は子供を一人ずつ投げていく。そしてそれを受け止めていくブロリー。

「先生はどうした!」

「今からそちらに背負ってく!少し待て!」

そう言うと男は先生と見られる女性を背負い、出口へと向かうが、

「チィ!」

建物の梁が二人に傾いていく。が、

「ハアッ！」

ブロリーは一瞬で梁に詰め寄りそのまま梁を支える。

「今のうちだ！」

「ああ！」

男がその下をくぐり外へ出たのを確認すると、ブロリーも手を離し外へと出て行った。

「…野郎どこに行った？」

ブロリーは気の探索を広範囲に渡り行っが、先程の男の気は感じない。

「それよりも大丈夫かお前ら！？」

ブロリーの大声で子供達は目を覚ます。

「うん…ここは？」

「ブロ兄？」

「大丈夫…だな。」

ブロリーは子供達の無事を確認する。

「先生は…」

「大丈夫ですよ。」

テレサの元気そうな声に安堵するブロリー。

「…それよりもここは危険だ。まさか先生は火の不始末なんかしないだろ？」

「え、ええもちろん。」

「だとしたら自然発火、…もしかすると放火だ。怪しいやつも見た。とにかくここから離れるぞ。」

「…分かり、ました。」

ブロリーとテレサ、そして子供達はマノリア村へと向かった。

## ーマノリア村

ブロリーはテレサと子供達を引き連れ宿屋に向かった。宿側にとつては深夜にいきなりの客で迷惑であつただろうが、テレサと子供達を見ると何か悟つたのであろうかすぐに部屋を用意してくれた。さらに言うところ子供達はすでに寝ている。

「すみません。私達のために…」

「いいんです。あなた方のためなら…」

宿屋の担当は優しく一行に語りかける。

「それよりも…何があつたんですか？」

「…孤児院で火事があつた。全焼だ。すまないが朝になったら一番にギルドの連絡してくれないか？」

「！…分かりました。」

そう言うと担当は部屋から出て行く。

「本当にありがとうございます。ブロリー…」

「いや、いいんだ。それよりも今は寝てくれ。」

「しかしブロリー、あなたも手を…」

ブロリーは燃え盛る炎の中、梁を支えていたのだ。常人ならそれこそ大怪我、火傷をするものだが、

「俺なら大丈夫だ。ほら、火傷一つ無い。…それよりも早く寝てくれ。疲れているだろう？」

「…はい。」

そう言うとテレサはベッドの中へ入っていった。

「…これから大変だな。」

ブロリーは小さく呟くと、気の探知をしながら夜通し警護をするのであった。

一翌日

子供達が寝ている間、付近には怪しい気は確認されなかった。ブロリーは周辺住民に目撃情報を集めに行ったが、何一つそれらしい情報は無かった。

「さすがに誰も見てないか…仕方がない、一旦戻るか。」

ブロリーは宿へ戻る。部屋の前にまで行くと中から騒がしい声が聞こえてきた。

「起きたか。」

「あ、ブロ兄。おはよう。」

子供達の視線がブロリーに集まる。

「おはようございます。」

「先生も…まだ疲れてないか？」

「はい、大丈夫です。しかしまだ現状を飲み込めません…。」

テレサは少々暗く答える。その時部屋の扉が開かれ、エステルとヨシユア、そしてクローゼが部屋に入ってきた。

「先生、みんな…!」

「あ、クローゼ姉ちゃん!」



子供達がクローゼの周りに集まる。

「みんな…どこにも怪我は無い？」

「うん、だいじょうぶだよ！」

「良かった…本当に良かったね…」

クローゼは今にも涙がこぼれそうになる。

「ふふ…よく来てくれましたね。」

「先生…！」

「その前にブロリーにお礼を言って下さい。彼は私達を助けてくれた上に燃え盛る梁を受け止めてくれたのですから。」

そう言われるとクローゼは奥にいるブロリーに視線を移す。

「ブロリー…ありがとう…あの、怪我は無い？」

「俺を誰だと思ってる？あるわけないだろ。」

ブロリーは大丈夫だといわんばかりに腕を上げる。

「エステルさんとヨシユアさんも一緒に来てくださったのね？」

「はい…ギルドに連絡があったから。」

「調査に来たついでにお見舞いに寄らせて頂きました。」

「そうですか…訪ねてきてくれてありがとう。」

「で、それについてなんです…」

エステルとヨシユアは言いにくそうに顔をしかめる。

「ねえ、みんな。お腹は空いてないかしら？食堂で何か頼もうと思

うの。ついでだから、みんなにも甘いものをご馳走してあげる。」

「え、ほんとお!?」

「ポーリイ、プリン食べたーい!」

子供達は口々に自分の食べたいものの名を挙げながらクローゼに付いて行き部屋の外へと出て行った。

「…クローゼには後で感謝をしないと。それで調査といったな。…どうだったんだ?」

ブロリーとテレサは身を引き締め真剣に聞き入る。

「まず、火災現場を調査した結果なんです。何者かによる放火の可能性が極めて高いことが判明しました。」

「そうですか…」

「やはりな…」

ブロリーとテレサは不本意ながらも頷く。

「助けてもらった後、簡単に話し合ったので私もそうだと思いますが…」

「そこでお聞きしますけど犯人に心当たりはありますか?」

「見当もつきません…ミラにも余裕はありませんし、うらまれる覚えも無く…」

「つまり、強盗目的じゃないし、怨恨でもないってわけね。」

「昼間にエステルさんたちがお見えになってからは特に…」

「そうだ、あの男には見覚えは無いのか?」

「あの男?」

黙っていたブロリーが口を開く。

「ああ、俺が助けに入った時にはすでに中にいたんだが…炎のせいで俺からは良く見えなかったんだ。その時点で怪しいんだが、どんな格好をしていた？」

「確か…像で色のコートをまとった20代後半くらいの男性です。見事な銀髪をなさっていました。お若いのに、苦勞なさったような深い眼差しをしていましたね。悪い方には見えませんでした。」

「まあ仮にも助けようとしたんだ。実行犯ではないだろう。」  
「…」

ヨシユアは何か思うところがあるらしく呆然としている。

「ヨシユア？なによブーツとしちゃって。」

「いや…そうだね。どこかの遊撃士かもしれないし…」  
「…失礼します。」

ヨシユアが目覚めたところでクローゼが戻ってきた。

「あれ、クローゼさん？」

「子供達はとうした？」

「下でケーキを食べていますが…それよりもお客様がいらっしやいました。」

『お邪魔するよ。』

その声と共に入ってきたのは、

「あつ…」

「ダルモア市長…」

ルーアン市長、ダルモア本人であった。

「お久しぶりだ、テレサ院長。先程、報せを聞いて慌てて飛んできた所なのだよ。だが、ご無事でよかった。」

「ありがとうございます院長。お忙しい中をわざわざ訪ねて下さって恐縮です。」

テレサは深々と頭を下げる。

「いや、頭を上げて下さい。それよりも、誰だか知らんが許しがたい所業もあつたものだ。ジョセフの奴が愛していた建物があんなにも無残に…心中、お察し申し上げます。」

「いえ…子供達が助かったのであればあの人も許してくれると思います。遺品が燃えてしまったのが唯一の心残りですけれど…」

そう言うとテレサは初めて辛そうな顔をする。

「遊撃士諸君。犯人の目処はつきそうかね？」

「いえ、詳しいところは調査中なのでいえませんが、ひよっとしたら愉快犯の可能性もあります。」

「そうか…何とも嘆かわしいことだな。こんな美しいルーアンの地にそんな心の醜いものがあるとは。」

「…」

ブローリーはその発言にどこか白々しさを感ずる。

「市長、失礼ですが…」

付き添いのギルバートが口を開く。

「今回の件、もしかして彼らの仕業ではありませんか？」

「ま、待って！『彼ら』って誰の事？」

エステルが慌てたように割り込む。

「君達も昨日絡まれたのだろう。ルーアンの倉庫区画にたむろしているチンピラどもさ。前々からそうだったが…奴ら、いつも市長に盾突いて面倒ばかり起こしているんだ。だから市長が懇意にしているこちらの院長に…」

「ギルバート君！」

ダルモアの怒号が部屋に響く。

「は、はい！」

「憶測で滅多な事を口にするのは止めたまえ。これは重大な犯罪だ。冤罪が許されるものではない。」

「も、申し訳ありません。考えが足りませんでした…」

「余計なことを言わずともこちらの遊撃士が犯人を見つけられるだろう。…期待してもいいのだろうね？」

「うん、まかせて！」

「全力を尽くさせてもらいます。」

「うむ、頼もしい返事だ。ところでテレサ院長、一つ言いたいことがあるんだが…」

「なんででしょうか？」

「孤児院がああなってしまうってこれからどうするおつもりかな？再建するには時間がかかるし何よりもミラがかかるだろう。」

「……」

テレサは下を向いて黙ってしまふ。

「どうだろう。一つ提案があるのだが。」

「…なんでしょう?」

「実は私は王都に別邸を所有しているのだが、たまに利用するだけで普段は空き家と変わらないのだが、しばらくの間、子供達とそこで暮らしてはどうだろう?」

「え…」

予想外の発言に呆然となってしまう。

「もちろん、ミラを取るなど無粋なことを言うつもりは無い。債権の目処がつくまで幾らでも滞在してくれて構わない。」

「で、ですが…」

「どうせ使っていない家だ。気がとがめるのなら…うん、屋敷の管理をして頂こう。もちろん謝礼もする。」

「市長…ですが少し考えさせて頂けませんか?」

「それも仕方がない。色々な事が起こりすぎたのだから。無理も無い。ゆっくりお休みになるといい。今日のところはこれで失礼する。その気になったらいつでも連絡して欲しい。」

そう言うとダルモアとギルバートは部屋から出て行った。

「…先生、市長さんの申し出、どうなさるおつもりですか?」

クローゼは困惑した表情でテレサに問う。

「そうですね…あなたはどう思いますか。」

「…常識で考えるのなら受けた方がいいと思います。だけど…一度王都に行ってしまったら…」

そこでクローゼは言うのを留める。

「ふふ、あなたは昔から聞き分けがいい子でしたからね。いいのよ、クローゼ。正直に言っただけだよ。」

「…思い出が…ジョセフおじさんに可愛がってもらった思い出が無くなってしまつような気がして…ごめんなさい、愚にもつかないわがままです。」

「ふふ、私も同じ気持ちです。あそこにはたくさん思い出が詰まつた場所。でも、思い出よりも今を生きることの方が大切なのは言うまでもありません。」

「はい…」

「ところで…水を差すようで悪いんだが…」

ブロリーが口を開く。

「タイミングが良すぎないか？」

「タイミング？」

「ああ、火事が起こつたのは今日の深夜、連絡したのは今朝がただ。市長にまで連絡が届くのはよしとしよう。…だが、その後の対応を決めるのは早過ぎないか？」

「でも、市長からのせつかくのご厚意だよ。そんなに疑うのはちょっと…」

「…」

ブロリーが話したために部屋が沈黙する。

「…近いうちに結論を出そうと思います。あなた達はどうか学園サインの準備に集中してください。あの子達も楽しみにしていますから。」

「…はい。」

「俺はここに残ろう。」

「いえ、この方々に警護を頼もうと思います。あなたも準備に専念してくださいね。」

「…ああ。」

話がまとまったところで四人は外へ出た。

部屋を出て宿の外へ出ると、マリイが慌てた様子で走ってきた。

「どうしたの？」

「あのね、あのね…クラムのヤツがどこかに行っちゃたのよ！」

「「「「はあ!?!」「」「」」」

一同は声を上げる。

「ど、どこかに行ったつてもしかしてマノリアの外に？」

「詳しく話してくれるかな？」

「はい…あのオジサンたちが来てからクラム、2階に上がったみたいで…すぐに降りてきて、真っ赤な力オして『ぜったい許さない!』とか言ってる…」

その言葉に一同は考える。

「ぜったいに許さない…そ、それってまさか！」

「…レイブンの所に向かったな。…あの馬鹿！」

そう言うと一同はルーアンへと向かった。



## 第一章？（後書き）

やっぱり平日の更新はこのぐらいの頻度になりそうです。

次話でやっと戦闘…っていいない戦闘が始まります。もう少しまとものを書かないと上達しないんだろっなあ…

## 第一章？

四人はルーアンに到着した。レイブンがたむろしているのはおそらく倉庫区画。一刻も早く向かわないといけなのだが、

「橋が…」

時刻は昼前となり、跳ね橋であるラングランド大橋は船を通すために上げられるのである。

「ど、どうしよう。」

「…お前ら掴まれ！」

「え、ちょ、ちよつと！」

ブローリーはエステル、クローゼを両脇に、ヨシユアを背中に乗せると、

「フンツ！」

「『え、え』」

そのまま水路を飛び越えた。

「ど、どんな脚してるのよー!?」

「そんな事はどうでもいい！早く倉庫に行くぞ！」

・倉庫区画

倉庫の中ではクラムがレイブン達に啖呵を切っていた。

「お前達がやったんだろ！？絶対に許さないからな！」

「なに言ってるんだ、このガキは？」

「ここはお前みたいなお子ちゃまが来るとこじゃねえぞ。」

「とつとと家に帰って母ちゃんのオツパイでも飲んでな。」

「ひやはは、そいつはいいや！」

レイブン達は汚い笑いを上げる。

「うっうっうっ…わあああああっ！」

クラムは耐え切れなくなりレイブンに向かっていくが、

「おい、このガキ…なにブチギレてんだあ？」

「母ちゃんが居ないからってバカにすんなよっ！オイラには先生つていう母ちゃんが居るんだからなっ！」

クラムは大声で、涙目で声を上げる。

「その先生の大切な家を…よくも、よくも、よくもおっ！」

「チッ…」

レイブンの一人、リーダー格のロツコはクラムの腹に突きを入れる。

「あつっ…」

「黙って聞いてりゃあいい気になりやがって…」

さらにクラムはディンに胸倉を掴まれ宙に上げられ、

「どつやら、ちつとばかりオシオキが必要みたいだなあ。」

「ひっ…」

拳を目の前にまで挙げられ、声にならない悲鳴を上げるクラム。その時、

ゴガアッ！

倉庫の扉が音を立てて吹き飛んだ。

「な、なんだ!？」

「お、お前達は…」

扉が壁に激突するとともに中に入ってきたのはブロリー達。いきなり  
の登場に驚いたディンはクラムを掴んでいる手を離す。

「ゴホ…ゲホツ…うわあああ!」

「クラムッ!」

呆然となっているレイブン達のを尻目にクラムはクローゼの元へ走り抜けていった。

「ウツ…ヒック…」

「よかった…無事でよかった…」

安堵するクローゼ。だが、それとは反対に、

「お前ら…何をやってるんだあ？」

憤怒の表情をあらわにし、相手を威圧するような態度で言うブロリ  
！。

「俺達はレイブンがやったかどうかなんて分からないが、それでも子供に手を出すとは…恥ずかしくないのか？」

「お前…女子供の前だからって調子に乗りやがって…この人数の前でよくそんな事が言えるよなあ！？」

レイブンの一人がブロリーに殴りかかってくるが、

ドカッ

音がした方向に目を向けてみると、そこには殴りかかった男が壁にめり込んでいた

「あ、ああ…」

「貴様ら、よく覚えとけ。」

ブロリーは静かに歩み寄っていく。

「俺達に…」

「この野郎！」

「ブロリー！！！」

男がブロリーにナイフを刺しに来る。が、

ベキッ

「手を出したら…」

「ひ、ひい…」

素手でナイフをつぶされる男。

「どうなるかを…な。」

言い終わると同時に、その男は宙を飛んでいた。

それからは一方的な虐殺と言うべきものだった。

躍りになって襲ってくる者達は折り重なるように吹き飛ばされ、ナイフを構える者は先程の男のように握りつぶされ、また吹き飛ばされる。あとに残ったのはロッコ、デインの二人のみ。

「後はお前達だけか？」

「う、うわあああ！」

デインがブロリーに体当たりを仕掛けるものの、

ドグチャ

そのまま顔を掴まれると、床に叩き付けられ、脚がピン、と張ったように伸びた。

「最後だ…どうしてやろうかあ？」

「く、来るな…来るなあああ！」

悪魔のような笑みを浮かべるブロリーに恐怖を感じ、後ずさるロッコ。ブロリーの後ろではエステルトヨシユアが武器を構えているものの、手出しがでずにただ呆然と立っているだけだった。

「おいおい、何を怯えてるんだ？」

「ひ、人殺し…人殺しっ！」

辺りにあるのは死屍累々となったレイブンのメンバー達。

「はあ…何を勘違いしてるんだ？」

「……え？」

ブロリーの一言に一同は啞然とする。

「殺しなんかしてないさ。ま、大分怪我しただろうが、なーに死んじやない。」

それを聞くとでヨシユアは近くに倒れている男の元に駆け寄る。

「…確かに生きてるね。」

「だろ？最初から殺す気なんてない。そんなことすればお前達が許さないだろ？」

そう言いエステルとヨシユアの方を見て笑顔を見せるブロリー。

「で、どうなんだ。まだやる気か？」

「い、いや。やらないよ。悪かった……」

ロツコはブロリー達に頭を下げる。その時、

「おいおい…何て有様だ……」

「……？」

赤髪の、大剣を背負った男が倉庫内に入ってくる。

「あー！アガット！」

「アガット？」



アガット、重剣のアガットという二つ名で知られ、今活躍するB級遊撃士である。

「何でここにアンタがいんのよ!」

「ジャンの奴に聞いたただだ。どごそのヒヨッコどもが放火事件を捜査してるってな。…それとロッコ。」

アガットはロッコの前に歩み寄ると、勢いよく顔を殴った。

「女に絡むは、ガキを殴るは…ちょっとタルみすぎじゃねえか…つて…」

ロッコは既に気絶していた。元々ブロリーへの恐怖で心が不安定であり、アガットの馬鹿力で殴られるとすぐに気絶してしまったのである。

「…やつちまったな。おい、お前ら。ちょっとこいつらをギルドにまで運ぶぞ。」

「え、なんで?」

「ここまでやられたら治療しなきゃいけないだろうが。それと事情聴取だ。…あとコレをやったのは誰だ?」

「俺だ。」

ブロリーが答える。

「後でお前も事情聴取させてもらっつ。その前にこいつらを運ぶのを手伝ってくれ。」

「ああ。」

こうして倉庫での騒動が終わった。

「ギルド

レイブン達を運び治療をした後、ブロリーの簡単な取調べが行われた。レイブンといえど完全に制圧してしまったので何か目的があるのでは、と疑われたのだが、その場に居合わせたエステルとヨシユアの証言でその疑いも晴れた。変わりに民間人に後れを取った、ということであガットに責められたのだが。

「はあ…終わった。」

「遅かったね。」

ブロリーが外の空気を吸いに出ると、クローゼがブロリーの元へ駆け寄った。

「ん？クラムは？」

「さつき先生が来て一緒に帰ってたよ。もちろん先生に怒られた。でもその後泣いていた…先生の泣いているところ、見るの久しぶりだったなあ。」

「そうか…」

二人同時にため息を吐く。

「そういえば皆さんは？」

「今、中で話し合ってるみたいだが…ちょっと覗きに行くか？」

「そうね。」

二人は中へ戻っていった。

「あ、あんですってっ！」

中では言い争いが繰り広げられていた。

「事件から手を引けっってどういうことですか。納得できる説明をしてください。」

「お前らは私情を挟みすぎなんだよ。遊撃士に限らず情が絡むと判断力は鈍るもんだ。そもそも民間人に遅れを取る準遊撃士に任せられるか。」

「うぐ…」

「そもそも正遊撃士の言うことには素直に従え。優先度はこちらのほうが上だ。…じゃあな。」

そういうとアガットは外に出て行った。

「な、なによもう…」

「仕方が無いよ。ここは大人しく従おう。」

ヨシユアがエステルを落ち着かせようとする。そこに、ブロリーと

クローゼが入ってきた。

「…すまん。」

「いいの。何もできなかった私達が悪いんだし…」

「いや、俺が勝手に動いたからな。本当にすまん。…ところであいつらはどうだった？」

レイブンはシロかクロか。

「…シロだったよ。アガットさんが気がついた彼らを“厳しく”取り調べたからその通りだろう。」

「そうか。まあ奴らにあそこまでする度胸はなさそうだな。」

四人は肩を竦める。

「ところでお前らはこれからどうするんだ。」

「調査は打ち切られたし…」

「でも私は院長先生とあの子達のために何かしたいと思っていたのに…」

エステルは悲しそうに言う。

「あ、あの。」

クローゼが口を開く。

「あなた達に依頼をしてもいいでしょうか？」

「依頼？」

「ええ。…遊撃士の方々というのは民間の行事にも協力して頂けるんですよね？」

「ああ、内容にもよるけど。」

ルーアンのギルドの受付、ジャンがはそう返す。

「でしたらエステルさん、ヨシユアさん。私達のお芝居を手伝って頂けないでしょうか？」

「え…？」

「それってどういうこと？」

二人はは聞き返す。

「毎年、学園祭の最後には講堂でお芝居があるんです。あの子達も、とても楽しみにしてくれているんですけど…」

「お、おいクローゼ。いいのかそんな…」

「ええ大丈夫。それにとっても重要な2つの役が今になっても決まらなくて…」

「も、もしかして…」

「その役を、僕達が？」

「はい、このままだと今年の劇は中止になるかもしれない。楽しみにしてくれているあの子達に申し訳なくて…もちろん謝礼も出ます。」

クローゼが言い終ると。

「やる、やる、やる！絶対やる！ありがとうクローゼ！ところでそれってどんな役なの？」

「詳しくは後のお楽しみという事で…片方の、女の子が演じる役が武術に通じている設定で、エステルさんにぴったりだと思います。」

「な、なるほど…」

「それでもう一つの役は？」

「そ、それは、私の口から言うのは…恥ずかしい、です。」  
「それってどういう意味…」

ヨシユアは軽く困惑する。

「ジャンさん、そもそもこういうのもアリなんですか？」  
「もちろん、アリさ。民間への協力、地域への貢献、もろもろ含めて立派な仕事だよ。」

ジャンは当然のように答える。

「アガツトが来たおかげでそれなりに余裕も出来たし…よかったら行って来るといい。」

「やったね！」

「ふう…何だかイヤな予感がするけど。あの子達のためなら頑張らせてもらうしかないか。」

「ね、ブロリーもいいでしょ。」

クローゼがブロリーに振る。

「…そういうことならしょうがないな。ま、よろしく頼むよ。」  
「それじゃ早速学園へGO！」

四人、特にエステルは勢いよく外へ飛び出していった。

## 第一章？（後書き）

お久し振りです。

最近私情で忙しくてなかなか更新ができませんでした。都合がよいときは早く更新できますが、やはり基本遅くなると思いますので、どうかお許し下さい…

## 第一章？

四人は学園に到着した。学園の規模、雰囲気に関心したエステルとヨシユアは施設内部を見学しようと考えたが、授業中なのでまず学園長に挨拶をしに行くこととなった。

### ー学園長室

部屋には立派な白髭を蓄えた壮年の男性、コリンズ学園長が書類に目を通していた。四人は挨拶をした後、孤児院の火事について聞かれたのでそれが放火事件であること、またその後の経過について当たり障りの無いよう説明をした。

「そうか…大変なことになったもんだ。ブローリー君が急に居なくなったのはそのためか。授業の出席点が引かれておるが、訂正するよと言っておこう。」

「ありがとうございます。」

「そうだな…まずは、学園祭を成功させて子供達を元氣付けること、そこから始めるしかないだろうな。」

「はい…」

四人は頷く。

「そこで、お芝居についてはエステルさんとヨシユア君に協力していただくと思います。」

話がまとまったところでクローゼが本題を切り出す。



「いい考えだと思うよ。エステル君、ヨシユア君。どうかよろしく  
願います。」

「あ、はい。」

「微力を尽くさせてもらいます。」

そう簡単に決めても良いのか、と思うほどあっさり許可してもらっ  
た。

「そうだな…他にも寮の手配をしておこうか。毎日、夜遅く練習を  
するだろう。どうか使用してくれ。」

「りよ、寮!?!」

「それは助かります。」

初めての集団生活になるだろうと胸を躍らすエステル、それとは対  
照的に素直に例を述べるヨシユアであった。

そしてその時、授業の終了を知らせるチャイムが鳴った。

「ちょうど授業も終わりだな。さっそく生徒会長に紹介してあげる  
といいだろう。」

「はい。」

四人は学園長室を後にし、生徒会室へと向かった。

## ― 生徒会室

「は〜忙しい、忙しい。各出店のチェックに予算の割り当て…」

「招待状の発送も問題なしだぜ。」

部屋の中では生徒会長のジル、そして副会長のハンスが休む暇無く動いていた。

「残る問題は、芝居だけか…このまま見つからなかったら俺達がやる羽目になるのかな。」

「私ともかくあんたは問題外でしょうが。衣装合わせした時のおぞましい恰好といったら…」

ジルはため息を吐きつつそう言い放つ。

「それだったらブローリーの奴はどうだったんだよ。結局俺達には恥ずかしいって見せてくれなかったんだぞ。」

「あら、結構良かったよ。元が良いしね。今のところあの役はブローリーが最有力候補だけど。」

「まじかよ…」

ハンスは驚愕の目でジルを見る。その時生徒会室の扉が開かれ、四人が入ってきた。

「ただいま。ジル、ハンス君。」

「あ、クローゼ。火事の話…大変そうだったじゃない。」

「ええ…」

クローゼは暗くなるものの、

「元気出しなさいよ。悩んでいたって仕方ないわ。チビちゃん達が楽しめるよう学園祭を成功させないとね。」

「うん。」

「ところで、さっきから気になってるんだけど…その人達、どちら様？」

ジルは見知らぬ二人に視線を合わせた。

「初めまして。あたし、エステルっていうの。」

「ヨシユアです、よろしく。」

「それじゃ、あんた達がクローゼの言ってた…！まさかつ。」

「ええ、協力してくれるの。」

クローゼがそう言うと、ジルの眼鏡は一瞬妖しく光り、顎に手をあてて何か考え始めた。

「あの…ジル？」

「あ、ああごめんなさい。初めまして私、生徒会長のジル・リードナーっていいいます。今回の劇の監督を担当してるわ。横に居るのは副会長のハンス、脚本と演出を担当しています。」

息継ぎ早にジルが自己紹介をしていく。

「ところでエステルさん。あなた、剣は使える？」

「まあ、それなりに…。」

「よっしゃ！これで決まりね。」

「え、ええ？」

エステルは何を決められたのか分からず困惑する。

「そしてヨシユア君あなたは…。」

「あ、あの…。」

いやらしい笑みを浮かべるジルにヨシユアは少し引く。

「ねえ、ハンス、ブロリー。あの役はヨシユア君にやってもらいましよう！」

「まじか!？」

「よっしやあ!！」

再度驚くハンス、拳を上には振り上げ喜びを表現するブロリー。そしてその様子を見て一気に不安になるヨシユア。

「ジ、ジルさん、一体何をやらせる気だい？」

「それは後のお・た・の・し・み！」

ジルは言い終わると指をパチリ、と鳴らす。すると、どこからともなく人が集まりヨシユアを縄で縛り上げてしまった。

「ちょ、ちょっと、ヨシユアになにをするのよ!？」

「あ、大丈夫だから。ちょっと借りるわね。さあ連れて行って！」

「すまん、初対面なのにこんなことして…」

「え、エステル!助け…」

最後まで言うことが出来ず、ヨシユアはそのまま部屋の外へと連れて行かれてしまった。

「ヨシユア…」

「あ、あはは…まあ大丈夫ですから。エステルさんも私についてきて下さい。」

クローゼもエステルを引きつれ外へと出て行った。

「さすがにあの役は美少年にやってもらわないと。」  
「ありがとう、ジル…」

部屋に残ったのはブロリーとジルの二人。ブロリーはあの役から離れられたことに感謝した。

「何を勘違いしてるのかしら？」  
「!？」

その一言でブロリーは身構える。

「ブロリーにはもっと大事な役があるんだから…ねっ！」  
「グハアッ！」

ジルは一瞬にしてブロリーを投げ、襟をつかんだ。

「な、なにをする！そんな役なんて聞いてないぞ！」  
「フフフ…ヨシユア君が来てくれたおかげで出来そうだし…さあ来なさい！」  
「ち、チクシヨオオオオオ！」

どこにそんな力があるのだろうか。ブロリーもまた、ジルに引きずられて外へと出て行った。

―講堂

舞台の上には衣装に着替えたクローゼとエステルが立っていた。

「うわぁ…こんな衣装初めて…」

「よく似合っていますよ。エステルさんが演じるのは貴族の『紅騎士ユリウス』、そして私が演じるのが平民の『蒼騎士オスカー』です。衣装の色が違うのはそれぞれの勢力のイメージカラーだからです。」

彼らの劇の題名は『白き花のマドリガル』、貴族制度が廃止された頃の王都を舞台とした話。平民出身の騎士と貴族出身の騎士による姫君をめぐる恋の物語である。彼女達はその主役を務めることになる。今回の劇では性別転換をしての配役で、クローゼとエステルはこの役となった。

「そして二人の騎士の身を案ずる『白の姫セシリア』だ。ささ姫、どうぞこちらへ。」

「ちょ、ちょっと待った。まだ心の準備が…」

そう言いつつ無理やり舞台に立たされたのは、白いドレスを身に着けたヨシユアである。

「…」

「…」

「頼むから何か言って…」

二人が呆然とするのも当然である。女性のカツラをかぶっており、元が美形なので、見る者全てが美女と見間違えてしまうだろう。

「いやあ…何というか…ぜんっぜん違和感無いわね」

「びっくりしました。はあ、すっごく綺麗です…」

クローゼとエステルはつい見とれてしまう。が、

「はい、そこまでよ！」

「あ、ジル。」

なにやら先程より深く怪しい笑みを浮かべるジルが現れた。

「ど、どうしたの…」

「ふふふ、ヨシユア君は綺麗過ぎて困るけれど、その程度で驚いてはいけない…さあ、ブロリー！こっちへ！」

「ブロリー！？」

その声と共に現れたのは、

膨れ上がっている筋肉はそのままに、

白いローブを身に纏い、

7枚の羽を背中に、

それは、この世で最も禍々しい、

「悪魔…」

「空の女神だ…」

「『『『ええええええ！』』』」

一同は悲鳴が分からない声を上げる。

「こんな女神様を出すつもりなの…」

「ええ、もちろん！」

「協会から訴えられないかな…」

「…分からないわね…」

「俺、死にたい…」

ブロリーはこの世に生を受けて以来の最大の屈辱を味わっていた。

「でもこの配役なら各方面からウケをとれること間違いなし。みんな、一致団結して最高の舞台にするわよっ！」

「『『『お、おお…』』』」

「俺、逮捕されないかな…」

前途多難な、犯罪的な学園祭の準備がようやく始まった。



## 第一章？（後書き）

エイドスの姿は勝手な妄想で決めました。絵的にまずくなりそうです。

女神と悪魔、はてさて一体どうなることやら…

## 結論

お読み頂きありがとうございます。作者のシャチです。

削除しましたが「相談」を投稿したところ、たくさんのご意見を頂きました。本当にありがとうございます。

そのご意見をふまえて再度考え直しました。

するとやはりこの設定のまま続けるという結論に至りました。

お騒がせして申し訳ありません。

これからより一層頑張りますのでどうかお許し下さい。

そしてこれからも応援よろしく願います。

再度申し上げますが本当にありがとうございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9025y/>

---

英雄伝説 悪魔の軌跡

2011年12月29日16時51分発行